

只木ミロ イラスト 鳴瀬ひろふみ

Story by Utsuki mizu  
Illustrations by  
Naruse hirafumi



特別試読版

Scramble Irregular

# スクランブルギョラー

悪魔使いと6つの異常

わたくしの

疾走する次世代のアンサンブル・ファンタジー、開幕! GA文庫

# ノブレス・オブリージュ 貴族的教育

叩き込んで差上げますわ!

この船では、ヤバイヤツしか生き残れない……!

第10回GA文庫大賞  
優秀賞  
受賞作

世界は誰<sup>だれ</sup>を中心に回っているのだろう。

# 第一章 爆ぜる世界の中心は

▽ 幸運 アレイスト・グッドマン

事件の全容を偽りなく語るとするなら——うっかり  
だつたとしか言いようがない。

誠に残念なことにも、アレイスト・グッドマンは孤児で  
ある。生後間もない頃には父も母も居たらしいが、不運  
な事故によつてその命を天へと昇らせてしまったらしい。  
そのような彼は、あまりまともな教育も受けず、当然、  
マナー講座の厄介やっかいになつたこともない。

だから、彼はバナナを食べた後、皮を捨てるに困つて  
テーブルの上に放置したのである。

それが悲劇の始まりだった。

しばらくしてやって来た男——どうやら、イベントスタッフであつたらしい——は、勝手にダンスホールへ侵入したアレイストに厳重な注意をした。それから、美しく整えられたテーブルクロスの上に、放置されたバナナの皮を見つけて怒鳴り声を発した。

『どういふつもりだ、こら！』

結果として、それが彼の最期さいごの言葉となつてしまった。激情に駆られたまま、イベントスタッフが詰め寄つてきた。驚いたアレイストは後じさり、うっかりとテーブルに触れてしまった。バナナの皮が床に落ち、イベントスタッフはそれを踏ん付けて転んでしまった。

アレイストは彼を助け起こそうと手を伸ばした。が、その手は呆気なく振り払われ、イベントスタッフは表情に鬼を宿した。男は懐から大振りのナイフを取り出すと、それを大きく振りかぶり、アレイストへと振るおうとしたのだ。

『なんでナイフなんて持っているのさ！』  
アレイストは一も二もなく、男に背を向けて逃げ出した。その直後、背後でどすんという大きな転倒音が聞こえ、つい振り返ってしまった。

新鮮な死体ができあがっていた。

イベントスタッフはまたもやバナナの皮を踏ん付けたらしく、また、その際に運悪く自らの腸をナイフで搔

捌いたようだった。……。……。

と、ここまでが偽らざる真実である。

じつにくだらないと思われるかもしれないが、事実と  
いうのはいつだって娯楽たり得ないモノなのだ。

しかし、多くの人間がアレイストと同様の考えを持つ  
わけではない。たとえば――

「――犯人はこの中にいる！」

なんて名探偵じみた宣言を披露する青年が居た。彼の  
背後では、まだ幼い少女――妹だろつか――が恥ずか  
しそうに俯うつむいている。兄の愚行を止めようとしているの  
か、その袖そでを何度も強く引いているが、兄の方は一向に  
妹のことを考慮しなかった。

名探偵とその妹のずっと後方には、死人のような眼をした男が居た。その男は非常事態だというのがに暢のんき気にワインを飲んでいて、死体をつまらなさそうに眺めている。もう片方の手にあるスマートフォンを用いて、写真撮影を行っている。

その不謹慎な行いを嘆く宗教家が居て、男にビンタを見舞うドレス姿の美少女も居た。

（本当に厄介なことになったなあ）

アレイストは犯行に用いられたナイフを左ポケットに忍ばせながら、溜ためいき息を吐ついた。

いったい、誰だれが真相を話して納得してくれるだろうか。まさか、男は自分でナイフを持ち出して、バナナの皮で

転び、腹を搔つ捌いて死にました、なんて……。

もう隠蔽いんぺいするしかないではないか。

アレイストはもう一度盛大な溜息を漏もらす。右のポケットへと手を伸ばした。そこにあるのはイベントスタッフが指に装着していた漆黒しゅくくのリングである。

窃盗せつとうの余罪まで増えてしまったが、アレイストはやむを得なかつたと考えていた。

指輪の価値は解わからないけれど、これが見つかるよつと厄介なことになるし、予感がしたから。アレイストの直感ちかはよく的中するので、こういう運任せな行動は彼の十八番おはこですらあった。

（まあ、この豪華飛空船での旅だつてくじ引きで手に入



れたしね）

ともかく、アレイストは持ち物検査から逃れるべく、ダンスホールから逃げ出した。

そして、これが後に《ヴィクトリア号の悲劇》と呼ばれる大事件の、発端となった。

▽ 小説家 ヴィクト・ファニー

退屈な旅行になりそうだ、という諦念<sup>ていねん</sup>めいた予感<sup>よかん</sup>は、まさかの乗船一時間足らずで覆される結果となった。悪くない傾向だ。

豪華飛空船ヴィクトリア号——その除幕式兼初フライトは盛大に執り行われた。

大富豪たちがこぞって金を出し合い、一生に一度あるかないかの名誉を奪い合うためにチケット争奪戦に精を出したそうだ。それくらい、この船は豪華な造りをしている。初乗船は随分と自慢になるだろう。いつだって、金持ちは自慢くらいしか娯楽がないのだから。

ヴィクトはコネを用いて乗船にこぎ着けた。とはいえ、彼の場合、船に乗ること自体にはなんの興味もなかった。

ただひとつ、今回の乗船客の誰かが『黒の書』と呼ばれる名書を持ってやって来る、という不確かな情報に飛びついただけである。踊らされているとは思うものの、数億分の一でもその可能性があるのならば、それに縋すがりたいほどに、ヴィクトは本を欲していた。

だが、現実というモノは甘くない。

勢いで乗船してしまうまでは良かったけれど、いざ乗ってみると、ミッションの達成が極めて困難であることに気が付いた。遅すぎる気づきだと思われるかもしれないが、ヴィクトは些事さじに拘こだわらない——要するに天然なのだ——性格をしているのでやむなしである。

誰が本を持っているのかも解らない。

基本的に引きこもりなのでコミュニケーション能力にも難がある。

たとえ見つけたとして、譲ってもらおう方法も不明だった。

だから、彼は旅行早々に目的の達成を諦あきらめてしまった。

もちろん、探すことを止めるやことはないけれど、見つかるかもしれないという期待は持たないことにしたのだ。こんなことならば自宅で小説を書いていた方がずっとマシだった……と後悔した矢先、ダンスホールで悲鳴があがったのだ。尋常ではない悲鳴。推理小説でいうところのページ目に相応ふさわしい鳴き声は、退屈していたヴィクトを慰めるのにちょうど良かった。

彼は早速、ダンスホールへと向かった。

豪華飛空船ヴィクトリア号は巨大な機体である。一階部分には、体育館ほどの大きさを誇るダンスホールがある。その施設を中心として、黒を基調としたお洒落しゃれなロビーであつたり、レストランやバーなどが併設されてい

る。船尾付近にはカジノもあるらしい。

いつまでも遊べるような施設設計となっている。

しかし、これがヴィクトを苦しめた。

何を隠そう、彼は重度の方向音痴なのである。声が聞こえるくらいに近い場所でも、ヴィクトからすればちよつとした冒険が必要になる距離だった。彼は、第一歩目からして真逆の方へと歩き出してしまった。

数分も同じ場所をぐるぐるとしているとき、自動販売機の前で項垂うなだれている、日本人の老翁ろうやに出会った。ヴィクトは道を探ねるべく、老人に接触することを決めた。

「そこの老人。少し尋ねたいことがあるんだが、良いか？」

「はて、私で良ければ何でもお尋ねくださいませ」  
 嫌みなほどに物腰の低い喋り方をする老人であつた。  
 歳の頃は八十後半といったところだろう。顔面には幾  
 十もの皺と、シミとが混在している。手入れの行き届  
 いた白髪は紳士然とした雰囲気を老人に纏わせている。  
 流石は、ヴィクトリア号に乗り込めただけあつて、かな  
 りのお金持ちであるとみた。  
 仕立ての良い燕尾服と杖とがよくマッチしている。  
 ヴィクトはうむと頷いた。それから、モノクルに軽く  
 触れた。

「そうだな。まずは礼儀として名乗ろうか。俺の名はヴ  
 イクトという」

「……私は、岡田<sup>おかだ</sup>米助<sup>べいすけ</sup>と申します」

「ふふん、米助。俺に道を教える権利をあげよう」

「なるほど、迷子でしたか」

米助は何度もしつこいくらいに頷<sup>うなず</sup>いた。だが、道案内の件について納得した様子はまったく見せなかつた。ヴイクトは何か間違えたのかと、内心で冷や汗を流していた。

米助は自販機の方を杖で指し示した。

「いえね、道案内をさせていただけたいのは本心なのですが、どうにもここに問題がひとつほど。喉<sup>のど</sup>が渴いたのですが、財布に金を入れてくるのを忘れてしまったのでございます」

「そうか。しかし、ならば尚更なおさら、俺に道を教えると良い。ダンスホールに行けばワインなり水なり……何でも飲み放題だろうさ」

「まったくその通り。しかしですね、職業病みたいなモノでして……どうにも他人が用意した液体には口をつけることが恐ろしいのでございます」

自販機の中身だったらまだマシですが、と老人は肩を竦すくめた。

ヴィクトは首を傾かしげた。

さて、この世界中のどこを探せば『他人が用意した液体に口をつける』ことが恐怖たり得る職業があるのだろうか、と。是非ぜひとも取材してみたい気持ち芽生えたが、



今はダンスホール方面の悲鳴を優先したい気持ち強い。  
ヴィクトは大人しく、ポケットから財布を取り出した。  
「おお、ありがたいことです」と米助は諸手もろてを挙げて喜んだ。「私は仕事以外はてんで駄目だめでしてね。財布を忘れるようなうっかりは頻発するのでございます。情けない情けない」

「いや、構わないさ。俺にも似たようなところがあるからな」

と言いつつ、ヴィクトは財布を米助へと放り投げた。  
慌てて財布をキャッチする米助。

「えっと、これは……？」

「やる。長旅になるんだ。その間、水ひとつ買えないの

は不便だろうか？」

ヴィクトは存外に善人である。困った老人が居るのならば、財布を渡すことくらいは平然とやってみせる。それに、さきほど述べたようにヴィクトは老人に親近感を抱いていた。

仕事以外は何もできない、というのはよく解るのだ。驚いたように目を見開く米助を見やって、ヴィクトは「ふふん」と鼻を鳴らした。

「好きな商品を選ぶが良いさ」

「……ありがたいことです。さて、ここでもうひとつ願いたいことがございました」

「俺は急いでいる。あまり願いを追加されても困るのだ

が……あとみつつまでだぞ」

「ランプの魔神さんより上手うわてでございますか!？」

ヴィクトの意外と広い懐ふところに、米助は仰のけ反ぞるようなり

アクションを取った。こほん、と咳せきばら払いをひとつ挟み、

米助は願いを口にした。

「いえね、私は職業柄、自動販売機のボタンを押すのが怖くてですなえ」

またもや不自然な職業病である。

ヴィクトはあとで絶対取材してやろうという気持ちを押し殺しながら、米助の望む飲み物を購入してやった。

ちなみに、米助が選択したのはコーラであった。

米助は緑茶でも啜すするような手付きで、恐る恐るコーラ

を□にすると、ようやく頬ほおを緩ゆるめた。

「では、参りませうか、ヴィクトさん」

ヴィクトは米助に連れられ、ダンスホールへと向かうのであった。

▽ 令嬢 リーゼロツテ・M・グレースネス

リーゼロツテ・M・グレースネスはグレースネス財団のご令嬢である。

その容姿は可憐かれんとしか言いようがない。金の髪は縦□

ールにまとめられていて、誰もが二度見するくらいのボリュームがある。顔立ちは凜りり々しく、かなり整っている。

唯一、胸のサイズだけは残念な小ささであるけれど、そ

れもまたスマートさとなり、彼女を彩る美点のひとつへと昇華されている。コルセットで下腹部が締め付けられているのが余計に、男性の劣情を誘うのかもしれない。知的な雰囲気<sup>ま</sup>を纏い、品性にも富み、何よりも男好きのする美貌<sup>びぼう</sup>を持つ、何処<sup>どこ</sup>に出しても恥ずかしくない、生粋<sup>きっすい</sup>の令嬢であつた。

そのような彼女であるが、此度<sup>こたび</sup>の豪華飛空船の旅は旅行目的ではなかつた。

リーゼロッテは遊ばない。

遊ぶくらいならばひとつでも多くのボランティア活動に励むだろう。彼女の性質は「馬鹿<sup>ばか</sup>」が付くほどの善であり、誰かが困っていればもちろん助けるし、誰かが困

っていないなければ困っている人を探しに駆け出してしま  
のである。

さて、そのような彼女が貴族趣味全開といった様相の  
ヴィクトリア号へ乗船したのは、すべからく理由がある。

「待っていてくださいまし、パパ。わたくし、必ずやパ  
パのために働き、この世を良くするお手伝いを致します  
わ！ 何故なぜならそれが——貴族的使命ノブレス・オブリージユですものっ！」

まるで戦隊ヒーローのような決めポーズを披露ひろうしつつ  
——両手を左斜め四十五度に傾げている——リリース  
ツテは宣言した。

幼少幼少の頃より、彼女は貴族的使命ノブレス・オブリージユを両親から徹底的に  
叩き込まれていた。その完成度たるや、教えた当人であ

る両親たちから「なんか違うんだよなあ」と言われてしまふほどである。

リーゼロッテはいつだって弱者の味方である。

だからこそ、リーゼロッテは弱者の悲鳴を聞き逃さなかつた。ダンスホール付近、まるで死体でも発見したかのような悲鳴を聞き届け、彼女は颯爽さつそうとドレスすそひるがえの裾を翻した。

「行きますわよ、みなさま！ 民が貴族をお待ちですわ」

ノブレス・オブリージユ 貴族的疾走っ！ と叫び、リーゼロッテは走り出した。

その後を追うのは大量の黒服集団である。むくつきき筋肉とグラサンの群れが、可憐な少女を追いつきといふ、警察が見たら緊急配備を行おうであろう光景が生み出

された。

しかし、警察諸兄は安心されるが良い。何故ならば、あの黒服たちは全員がリーゼロッテの護衛なのだから。彼らの視線が揃そろって、リーゼロッテの無闇むやみに短いドレスの裾——時折、水色の下着がチラリズムする——にあるのは、彼女がパンチラしてしまわないか、したらガードしようという意識の表れであると信じる必要がある。とかく、リーゼロッテはダンスホールに辿たどり着き、そこで——死体を見つけた。

「なんてこと！ また一人、わたくしは救えなかったのですわね……チップも手に入れていないうちに、このよ  
うな惨劇が繰り広げられていたただなんて」





あまりの悔しさに、リーゼロッテがハンカチを噛<sup>か</sup>んで  
 いると、正義感の強そうな青年が一步前へと出た。そし  
 て、彼は死体の周囲に集まった人物たち——総勢三十  
 人ほどか——を見渡すと、鋭い目付きでこう叫んだ。

「——犯人はこの中にいる！」

その台詞を聴き<sup>せりふ</sup>遂げたりーゼロッテの胸中には、感動  
 が込み上げていた。まさか、こんな短時間で犯人を見つ  
 けてしまうだなんて、と。自分と同じ貴族的<sup>ノブレス・オブリージュ</sup>推理力を有  
 する人間が、偶々<sup>たまたま</sup>この場に居たなんて……という感動で  
 ある。

しかし、黒髪の青年はそれつきり黙ってしまった。目  
 に掛かるほどに長い前髪が、頼りなさげに揺れている。

無言の青年の背後から、幼い少女がちよこんと顔を出した。

「ね、ねえ、お兄ちゃん。そういうの、止めようよ、ね？」  
「気にするな、妹よ。兄たるモノ、妹の前では常に名探偵であらねばならぬのだ。何故ならば、ぼくはキミの兄だからだ。兄だからだ。兄だからだ」

「うん、お兄ちゃん。お兄ちゃんは、私のお兄ちゃんだよ」  
「兄だからだ。兄だからだ。兄だからだ。兄だからだ」  
と、黒髪の青年は壊れたスピーカーカーミたく、同様のことを繰り返した。

リーゼロッテが不気味に思っていると、背後からパシヤリというカメラ撮影の音がした。振り返ると、死人の

ような目をした男が居た。

見事な栗毛くりげをした男性である。身長が異様に高く、針金のように線が細い。モノクルを掛け、長丈のチエスタ―コートを身につけている。

この船に乗っている人間にしては、ずいぶんと安っぽい服装だった。しかし、そういう些事が気にならない程度に、その男の目付きは死にきっていた。

その男はワイングラスを片手に死体を撮影していた。あまりの冷酷さに、リーゼロッテは激怒した。

「何をしていますの、そこの貴方様！」

「撮影だが……？」

「死者を冒瀆ぼうとくするのも程ほどになさってくださいましー！」

「冒瀆？ 俺はそうは思わないがね」

男は何気ない動作でワインを口元に運んだ。更にパシヤリ。

それがリリースゼロツテの我慢の限界であつた。彼女は一瞬で男へと踏み込むと、

「——反省なさい！」

男に強烈なビンタを見舞つた。

男が持つていたワイングラスが手放され、中身の赤ワインが妙にゆっくりと、それでいて派手に飛び散つた。紅の絨毯じゅうたんにワインが染しみていく。

静まりかえつたダンスホールに、澄み切つたビンタの音が響いた。死人も生き返りそうなくらいの、盛大な

炸裂音さくれつであつた。

それを喰くらつた男は吹き飛んでいた。

といつても、それは床に倒れ伏す——というのが正解である。が、その場に居た全員は男が吹き飛ばされたのだと確信していた。

「死者を無断で撮影するのは非貴族的ノ・シ・ノ・ブ・レス・オ・ブ・リー・ジュですわよっ！ 反省なさつてくださいますし。そして貴方様をぶつたわたくしも非貴族的ノ・シ・ノ・ブ・レス・オ・ブ・リー・ジュですわ！ さあさ、早く、わたくしの両頬をぶちなさいな！」

「……ふふん。いや、お前の世界観についていけないのだが……まあ良いさ」

そう言うと、目付きの死滅した男はリゼロツテの両

頬を挟み込むようにしてビンタした。が、それはビンタというよりも、どちらかという頬を撫なでるような接触であつた。

リーゼロッテの整つた顔立ちが、ムニムニと弄もてあそばれる。目付きの死んだ男が軽く片目を瞑つむつた。

「俺の名はヴィクト・フアーニー。はて、俺がどのような無礼を働いたのかはピンと来ないが、それについては謝罪しよう。そして、死体の写真は二度と撮らないと誓うよ」

「解つていただければ幸いですわっ！ わたくしの名はリーゼロッテ・M・グレースネス。しがない貴族ですよ」

両者は静かに握手を交わし、あっさりとは和解した。

その場に居た二人を除く全員は困惑を強めた。けれど、

リ―ゼロツテはそれに気付かず、死体の方へと近寄っていった。

「鋭利な何かで腹を裂かれていますわね。しかも、かなり深く……よほど、この方に恨みがあつたのでしよう。また、犯行に用いられたと思わしき凶器が見当たりませんわね。相当な大きさの刃物でないと、この傷は付かないと思われませう」

また、このヴィクトリア号はかなり嚴重な警備体制が敷かれています。最新防衛人工知能が統括とうかつしているという防御システムもあるらしいし、そもそも武器の持ち込みは禁止されている。乗船の際に入念なボディ―チェックが行われたのだから間違いない。



凶器は何処から持ち込まれたのか。

そして、それは何処へ行つたのか。

凶器の行方——それが今回の事件を解決する上に於いて、重要な要素となるのは目に見えている。ゆえに、まずやるべきは改めての入念なボディチェックだ。

「では、みなさま。貴族たるわたくしが命じます。取り敢えず全員——服をお脱ぎなさい」  
こうしてダンスホール内は沈黙に包まれるのであつた。

▽ 邪教主 じやまじょうしゆ パネロペ・ドア

いきなり服を脱げと命じてきた少女に、パネロペは内心、驚愕きやうがくしていた。というか、隠しきれずに表情を露骨

に青ざめさせていた。

（この少女、かなりのやり手か）

パネロペは目の前の少女、リーゼロッテが神敵であると認定した。

パネロペは服の下を見られるわけにはいかない。そこにはとても大切な、それでいて誰かに見られるだけで計画の破綻<sup>はたん</sup>を意味する道具を仕込んでいたからだ。

ここでボディーチェックをされるのは拙<sup>まづ</sup>い。

どうにか逃げねば——と仲間の一人にアイコンタクトを送っていると、背後で重厚なドアが乱暴に開かれる音がした。ダンスホールに至るためのドアは四方にあるが、その中でも左舷側のドアが開かれたのだった。

現れたのはスタッツらしき男性であった。青い制服が彼の身分を証明してくれている。その制服の男性は必死の形相ぎょうしんじょうで言った。

「みみみみみみみ、みみみみみみ。みな、みなさま、おおお落ち着いて」

「いや、お前が落ち着け？」

「とととと、ともかかかく、この船を止めます！ ので！ いったん引き返して、警察さんに頼んであれこれでしゅー！」

途中、ヴィクトが声を挟むも無視をして、スタッツは続けた。

「みみみ、皆様は、いったんお部屋でおままままま、お

待ちくだしやれ」

やや解読に時間を要したが、つまりは引き返してしま  
うらしい。

（これはまずいか。もはや、行くしか道はねえな……）  
ごくぐり、とパネロペは喉のどを鳴らした。そして、仲間た  
ちへと――いや、信徒たちへと目配せをすると、自ら  
の司祭服の前をはだけさせた。

「待ってもらおうか！」

その場に居た全員が押し黙るのが解った。

特に、制服の男性に至っては泡を吹いて気絶した。悪  
いことをしたかな、とパネロペは少々の罪悪感と共に、  
自分たちの目的を叫んだ。

「オレたちは『邪教』を信仰する者。暗黒邪神《ヒルデ  
ヨルデ》様が定めし戒律に則り、この船をハイジャック  
する！ 大人しく手を挙げて、言うことを聞きな」

「……ほう、ハイジャックとは面白い」

「その目付き悪男！ 黙りな。あなたは良くないぜ？

折角、《ヒルデヨルデ》様が与えてくださった加護付

きの身体を、写真なんてつまんねえもん<sup>からだ</sup>に収めやがって

……あんたもさつさと平等になるか？」

「言っている意味が解らないが、黙ってやろう」

「ちっ」

パネロペは舌打ちをしてから、自らの肉体にくくり  
つけた道具——ダイナマイトを愛おしげに撫でつけた。

硬質な兵器の感触に思わず破顔してしまふ。これが自らの功德くどくを跳ね上げる装置となり、己おのが魂を約束の地へと送り出す花火になるのだ。

興奮しないわけがない。

だが、とパネロペは一度溜息を吐いた。

「……めんどくせえが、布教も功德の一環だからな」

「教主様、ここはわたくしめが」

「解った。じゃあ、あんたがこいつらに教えてやれ。自分らの宗教観が如何いかにゴミクズで、オレたちの邪教がどんだけビューティーなのかをよお」

「よろこんで！」

信者の一人が目を蕩とろけさせ、陶醉したように語り始め

た。

「我ら邪教の教えは平等なり。死を司つかやどりし暗黒邪神へヒルデヨルデ様は平等をお望みである。すべての人類は、自らが敷いた勝手なルール、もしくは他神による洗脳の末、不平等に陥おちいつた。されど、我らが神はそれを望んでおられない！」

「死こそは平等！」

「死こそは正義！」

「死こそは到達！」

「死」「死」「死」「死」「死」「死」「死」「死」「死」「死」

「死」「死」「死」「死」「死」「死」「死」「死」「死」「死」

「死」

引き連れてきた信者たち——総勢、十三名。邪教的に縁起の良い数字だ——の聲が船内を揺るがした。見渡す限り、豪奢ごうしゃなモノしかない船内は信者たちの気分を害したらしい。

天井てんじょうに満天と輝くシャンデリアが、忌々いまいましく光を吸って輝いている。その明かりの下、宝石だらけの衣服に身を纏う富豪ども。つくづく世界は不平等らしかった。

《ヒルデヨルデ》は死を司り、そして人々に平等な死をもたらす。どのような富豪とて、貧民とて、行き着く先はすべてが死である。ということは、神は人々に平等を求めているということに他ほかならない。

だというのに、傲慢ごうまんにも人はそれを良しとしない。



最近に至っては不老不死の研究だなんて馬鹿げたこと  
まで行<sup>おこな</sup>う始末。

人々が増えきれば資源が枯<sup>こ</sup>渴<sup>かつ</sup>するよう<sup>こ</sup>に地球はでき  
ている。それは人々の不死を摂理が拒絶しているという  
証<sup>しょうさ</sup>左である。——とパネロペは信仰している。彼の思想  
はとことんまでが邪<sup>よこしま</sup>に染まっ<sup>よ</sup>ていて、自らの幸福のため  
に他者を害することを厭<sup>いと</sup>わ<sup>な</sup>ない。

また、彼は本心で「自分が幸せと感じるモノは、他者  
にとっても幸せをもた<sup>ら</sup>す」なんて子どもじみたことを  
考<sup>か</sup>え<sup>え</sup>ている。

稚拙<sup>ちせつ</sup>な思想。

けれど、彼の求心力は思いの外高く、今では立派な教

祖である。

（すべては『邪書』の導きの賜<sup>たまもの</sup>だけどな）

想<sup>おも</sup>い人を奪われ、何もかもに絶望していたパネロペ。

そのような彼を地獄の底から救ってくれたのは、古書店で見つけた一冊の本であつた。真<sup>ま</sup>っ赤<sup>か</sup>な血で塗りたくつたような表紙の、無題の本。

そこに描かれていたのはパネロペのまったく知らない神話であつた。

ゆえに、パネロペは本を信じた。

自分と、そして自分が愛しく想う人が幸せになるために。

たくさん殺す。

平等に、厳密に、自由に、奔放ほんぼうに、非道に、善良じやうりやうに。  
とにもかくにも殺し尽くす。殺戮さつりくと生と死との狭間はざまに  
光る、一縷いちるの希望に全霊を賭として。  
満足するまで殺すのだ。

その晴れの舞台として選ばれたのが、この豪華飛空船  
ヴィクトリア号である。

金持ちだけが集められた、不平等の坩堝るつぼ。これを某国  
の主要政治機関にぶつけ、世界から多くの不平等を消し  
去るのである。——己おのが肉体ごと。  
準備は万端である。

この日のためだけに信者を増やし、スタッフの中に信  
者を紛れまぎれ込ませた。ボディーチェックを担当する者を

上手うまく手中に収めることによって、邪教徒たちは大量の武器弾薬を持ち込むことにも成功している。

ダイナマイトもそのひとつ。

「今からこの船はオレらのもんだ。しかし、オレたちも悪魔じゃねえ。最期に、家族とか大切な人に『お別れを言う権利』をやろう。ただし、メールなり電話なりの最後にはちゃんと『お前もきちんと後を追うように』って付け加えろよなあ？」

神父然とした優しい顔立ちのパネロペ。しかし、その雰囲気とは真逆の殺意が、彼の存在を異様に引き立てる。殺意という名のスポットライトが、神父服を昏くらく演出している。

多くの客が恐怖に震えている。あるいは家族や恋人に会いたくて震えているのかもしいが、その辺のことをパネロペは気にしない。

平然としているのは、ヴィクトという目付きの悪い男と、リーゼロッテなる変人女くらいのモノである。それ以外は全員、かなり動揺しているように見える。

泡を吹いたスタッフは異例にせよ、特に、机の下に潜ってガタガタ震えている日本人の老爺なんて……と老人の顔を見やった瞬間。

パネロペは一瞬、心臓を驚搦わしづかみにされた気がした。

「総員！この場から離脱するぞ！一番だけは残って奉仕しやがれ」

パネロペの命令が発せられたと同時に、信徒たちが動いた。

一番と呼ばれた男性だけが前に大きく踏み込み、手にしていた起爆装置に指をかけた。それが押し込まれるよりも先に、他の信徒たちはダンスホールから飛び出した。ドアを閉める。

直後。

雷でも撃ち込んだような轟音ごうおんが鳴り響いた。

空の上にある船だということに、その揺れたるや地震を彷彿ほうふつとさせるほどである。

「二番、ドアを開いて内部を探れ。生き残りがいたらあんたが二発目となれ。他は別行動をとって、パイロット

を見つけ出すぞ。オレらはもつともつと殺さなくちゃならねえからよう」

二番がドアを開いて内部を観察した。

ダンスホールの頑強な壁が粉々に砕け散り、床には巨大な穴が開いている。如何にも高価ですと主張していたテーブルも、そこに並べられた豪華な料理たちも、何もかもが吹き飛んで瓦礫を構成するパーツと成り果てている。

血飛沫と血溜まりがあり、宝石の破片や上質なシルクが焦げているのが見える。

思わず、二番と呼ばれた男性はほくそ笑んでいた。

二番はスラム街で育ち、ろくに文字も書けず、盗みで

生きていくことしかできないような人間であつた。盗みでしか生きられないというのに、恵まれた大人たちは、彼が物を盗むと酷くひどブツのである。

ずっと耐え忍んでいたところを、「耐える必要なんでないんだぜ」と教えたのが、パネロペであり、彼が渡した邪書であつた。

二番はパネロペを信じているようだつた。

『おかげで今では邪書を通して文字を読めるようにもなつた。盗む必要もなければ、誰かに殴られる心配も、誰かを殺したくて我慢する苦痛を味わうこともない』

率直そつちよくに言つて最高だ……と二番は嬉うれしそうに言つてい

たのだから。



だからこそ、二番の死は幸福に満ちていたと述べておこう。たとえば彼が、顔面を何かによつて縦方向に真まつ二ふたつにされようとも、である。

あらゆる不平等が滅びたと、そう思つて見ていた景色。だが、そこには一匹の怪物が息を潜ひそめて生存していた。——それは老人の形をしていた。

「まったく、困つたモノでございますね。いきなり爆弾だなんて怖くて怖くて……ついつい余計な殺しをしてしまいました。長生きのために必要なのは最低限でございませよ。あんまり殺すと、怖いですからねえ」

岡田米助と名乗る日本人。  
白に尽くされた頭髪には、少々の灰が降り積もつて汚

れている。仕立ての良い燕尾服もまた爆発ばくはつの余波で所々破けている。けれど、彼自身は無傷であつた。

米助は表情に恐怖を貼り付け、しかしそれでいて笑みを口元に湛たたえて言葉を紡つむぐ。

「……ターゲットも見つけましたし、今回の脅威も目視できませんでした。まあ、序盤にしてはまずまずの展開といったところでございませうなあ」

米助の手元で灰ほのかに銀の光が発せられた。

パネロペは一目散に逃亡していた。周囲には、仲間である十一人の信徒たちが併走してくれている。だけれど、彼らは怪物相手では頼りにならなかつた。

「どうしてあいつがこんなところに居やがるんだ！」

パネロペの咆吼ほうこうは我武者羅がむしやらだった。理不尽を、不平等を嘆く、憐あわれな声。

「——最老の殺し屋。岡田米助！」  
悲鳴にも似た声をあげたその先、彼らの前に立ち塞ふさがる影があつた。

米助ではない。

そこに現れたのは大量のドラム缶であつた。そのドラム缶の底部にはキャタピラが接着されており、自由に移動することができるとうだった。

ドラム缶の一体が前に出た。

警告。警告。警告。自動防衛人工知能……アイギスシステムによる防衛申請あり。これより防衛に移行します。

お客様を害するゴミをお掃除致します。降伏の場合、武器を捨て、その場に伏せてください。繰り返します》  
「ちっ。さっきの爆発の所<sup>せい</sup>為<sup>い</sup>で誤<sup>ご</sup>魔<sup>ま</sup>化<sup>か</sup>してた人工知能ま  
で動き出しやがったか。まったく、次から次に不都合ばっ  
かり来やがって。大人しく神に奉仕してるや！」  
それが開戦の合図であった。

ドラム缶型お掃除ロボット（重火器搭載）と武装邪教徒たちによる熾<sup>しれつ</sup>烈な戦争の火蓋<sup>ひぶた</sup>が切られた。戦場じみた銃声が連続した。

▽ 小説家    ヴィクト・フアニー  
間一髪であった。

謎なぞのテロリスト集団による自爆に巻き込まれる寸前だった。あと数秒でも判断が遅れていれば、あの場の死体が確実にひとつ増えていたことだろう。

ヴィクトは安堵あんどの溜息とともに、自らの腕に抱いた少女を見やった。

リーゼロッテ・M・グレースネス。

見み目め麗うるわしい美少女であり、稀代きだいの変人でもあるご令嬢だ。白を基調としたドレスは、一連の騒動でかなりボロボロになってしまっているが、まだ衣服としての機能は辛うじて失ってはいないようだった。

その点について、ヴィクトは少々残念に思っていた。仮に服が派手に破けていれば、その下に隠匿いんとくされた肌

色が拝めただろうに、と。

リーゼロッテは気絶している。白い頬の上、黄金の髪が垂れている。灰が薄らうすと掛かり、彼女の綺麗きれいな顔を汚している。

ヴィクトはそつと頬に指で触れ、汚れを拭ぬぐってやった。「……ん」とリーゼロッテが悩ましげな声をあげる。

なんだか居たたまれず、ヴィクトが目線をずらすと、めくれたドレスの裾が見えた。その下には水色のショーツがある。乙女おとめの真っ白な太ももが、ショーツの下から伸びていた。ちょうど、シヨーツと太ももの付け根とが隣接している部分で、微かすかに生地きじが折れている。

この薄い布の下には、女性の女性たる象徴が無造作に

呼吸しているのだ。

ヴィクトは生唾なまつばを飲み込んだ。

つい食い入るように凝視を始めたところで……リゼ  
ロツテが目を覚ました。

ちっ。

「どうかしましたの、ヴィクト様。わたくしと一緒に  
お風呂ふろに入れなくなっただ頃のパパみたいな顔をして  
……？」

「ふふん、お前にひとつだけ忠告しておいてやろう。父  
親とは距離を置いた方がよいぞ」

「たしかに。わたくしはパパに頼ってばかりですものね  
っ。貴族グレース・オブ・フリージュー的自立、大事」

「何でもノブレスなんちゃら言えれば良いと思っ  
てないか？」

「思ってますわあ！」

ヴィクトは頭を抱えた。こいつは馬鹿だ、と確信したためだ。

頭痛の種がひとつ増えたやも知れぬ、という懸念<sup>けねん</sup>はあるものの、おおよそ最善の行動が尽くせたとヴィクトは満足していた。

あの爆発の刹那<sup>せつな</sup>。

ヴィクトは咄嗟<sup>とつさ</sup>に近くに居たリーゼロッテを抱きかか

えていた。そして、最も近くにあつたドアから脱出したのだつた。彼女の護衛は全滅してしまつたと思われる。



が、主あるじであるリーゼロッテを救えたのならほんもうば本望ほんもうだろ  
う。

正直、わざわざリスクを冒おかしてまでリーゼロッテを助  
ける義理はなかったが、見捨てる理由もこれと言つて持  
ち合わせていなかった。反射的に身体が動いたただけだ。  
まあ、救つておけば「良いことをした」という満足感  
が得られてお得である。

とヴィクトは適当な言い訳を見つけた。彼は自身が根  
源的に善人に寄つていふことを、いまいち肯定的  
に見られないのだ。恥ずかしく思つているくらいだった。

「あの老人を助けてやれなかったのは惜しかったが  
……」

ヴィクトをダンスホールにまで案内してくれた老人。  
岡田米助。

ヴィクトは彼のことを高く評価していたし、親近感も湧<sup>わ</sup>いていたので残念極まりない。案内を要請しなければ、彼が死ぬことはなかったのだ、と思えば罪悪感もひとしおである。

リーゼロッテが周囲をキョロキョロと見渡した。

「ところでヴィクト様。わたくしの護衛の方々は何処<sup>どこ</sup>に……？」

「解らない。が、おそらくはこのドアの先に居るんだろう。……生きているかどうかは見ないことには判断できないがね」

「そう、ですの……」

リーゼロッツテは肩を落とし、完全に俯うつむいてしまった。床に数滴、雫しずくが落ちていく。

よつぽど悲しいのだろう。彼女の手は強く握られ、真っ白な肌が更に白く染まっつていて痛々しい。爪つめが食い込むあまり、血液けつが滴したたり始めた。

彼女は不意にカツと目を見開くと、ドアを全力で開いた。

そこにあっとどたのは地獄であつた。死体の山だ。しかも、原形を留とどめとどめている死体の方が少ないくらいで、吹っ飛んだ頭部から脳髓のうずいが零こぼれている死体すら珍めづしくない。爆破ばくはの事実を強調するかのように、火薬の臭いが鼻を突いた。

「第一部隊は全滅、ですわね。ああ、アイザック、キリスカ、後藤、ミズワール、ヘイレー、オスカー、ワルド  
 ……貴方たちは立派な貴族的戦士でしたわ……」  
 嗚咽おえつの混じった声。

しかし、リーゼロッテはすぐさま涙を拭ふいた。拭いたそばから涙が溢あふれているが、彼女は気にした風もなく、美しい顔が鼻水で汚れているのにも無関心だった。

「貴方たちの立派さに、わたくし——リーゼロッテ・M・グレースネスは必ず報いてみせますわ。そして、わたくしが守り切れなかった他の乗客の皆様にも、謝罪を」  
 申し訳ありませんでしたわ、とリーゼロッテは誰も居ない空間に頭を下げた。

それを見たヴィクトは感心したように微笑ほほえんだ。

「ふふん、ずいぶんとまあ見上げた精神だ」

「当然ですわ。それが貴族ノブレス・オブリージュ的行動ですもの」

「なるほどな……ノブレスなんちゃらは意味不明だが」

ヴィクトはそれだけ言うと、スマートフォンを取り出した。一応、警察へと通報をしておこうと考えたのだ。

果たして、このような状況で警察がどれほど役立つのかは解らないけれど。

通報を終えたヴィクトは、リーゼロッツテに視線を投げかけた。

「お前はこれからどうするつもりだ？」

「もちろん、貴族ノブレス・オブリージュ的守護ですわ。きつと、あのテロリス

ト様たちに怯おびえている民がたくさんいらっしやいますもの。

わたくしは全身全霊を以もつて皆様を助けねばなりません」

「お前には不可能じゃないか？」

「はて、何故でしょうか？」

「単純な話、お前では力が不足している。テロリストから誰かを守ろうというのが、ただの人間には烏おこ許がましいことだと思いがね」

歯に衣きぬ着せぬ物言いのヴィクト。

きつとリーゼロッテは悲しんだり、悔やんだり、怒つたり、そういった感情を見せると思ったのだが、その期待は完全に裏切られることになった。

リーゼロッテはケロリとした表情で、

「知っていますわよ？」

と言いきった。

目を剥くヴィクトを尻目に、リゼロツテは自らのス

カートをたくし上げた。水色のショーツが露骨に白日の

下へと晒される。美少女が自らの意思で下着を露出させ

る……突然訪れた背徳行為にヴィクトは目を奪われた。

また、特筆すべきは下着だけではない。

大袈裟にたくし上げられたドレスの所為で、臍付近ま

でが見えている。引き締まった、それでいて柔らかさう

な少女特有の体つき……くびれた腰つきも堪らない。

「見えました？」

「あ、ああ、貴族はその格好を制服とするべきだと思う





な」

「はて？ わたくしが申し上げたいのは、このお腹なかのところの火傷やけどですが……」

よく言われてみると、なかなか盛大に火傷を負っているのが解る。

（身体のエロさで気付かなかつた）

しかし、一度認識してしまえば、これがかかなりの重傷であつただろうことが理解させられる。傷を負つてからずいぶん経たっているようで、多少はマシになつているようだ。

「で、それがどうかしたか？ エロいモノはどうあつたつてエロい、ということのを俺に教えてくれたのなら、大

成功だ。保健体育の先生がお前の天職だろう」

「貴族をクビになっただら試しますわ……ではなくて！」  
リーゼロッテはそれきりスカートから手を離してしま  
った。ふわり、とスカートが緩やかに元の位置へと舞い  
戻ってしまふ。

チラリズムもまた良し。

こほん、と彼女は咳せき払いの後、

「これはわたくしが昔に負った後悔の傷ですわ。まだ、  
小学校に通っていた頃、帰り道で火事になっただお家を見  
つけましたの」

「ほう、それで助けに行っただと？」

「もちろん。子どももたるわたくしは無力でしたが、三人

の命を助けることができずしたわ。彼らはわたくしにたくさん感謝をして。そして、四人目が居ないことに気が付いてわたくしを責めましたわ」

リーゼロツテは澄んだ瞳でヴィクトを見つめた。

「わたくしはとて後悔しました。炎が怖くて、痛くて、前に進むのを躊躇ためらってしまいました。その所為で四人助けることができずしたの。この傷は、わたくしが恐れ、躊躇ためらった証拠なのですわ」

だから、

「わたくしは弱くても前に進まなくてはなりません」

たとえば、努力に嘲笑あざわらわれようと。

たとえば、頑張りに裏切られようと。

「止まることは決してできません。今のわたたくしがどれだけ至らなくても、それが前へと進まない理由にはなりませんわ。次はもつと助けられるように」

「そうか。お前は炎に飛び込めるタイプの女というわけか。初めて見るよ」

リーゼロッテの告白を留意しつつ、彼女の肉体を見やると、なるほど努力の証が<sup>あかし</sup>ぽつぽつと散見された。鍛えられた身体は、少女らしさを十二分に残し、あまつさえ強調さえしているが、相当の訓練の賜であろう。

さきほど、握手した際、手は結構ゴツゴツとしていた。あれは何かの訓練でもせねば辿り着けない境地であったやもしれぬ。武道の心得のないヴィクトは想像しかでき

ないが、リーゼロッテは様々な努力をしているのだろうと思われた。

あまり役には立っていないようだが……。

「解った。先の言葉は訂正させてもらおう」

「いえ、わたくしの力が足りぬのはまったくの事実ですわ。お気になさらないで」

「ならば気にしない」

とヴィクトは肩を竦めた。

「それでお前はこれから民とやらを助けに向かうのか？」

「ええ。そちらで他の護衛たちと合流しまして、  
ノブレス・オブリージユ  
貴族的護衛ですわ」

「そうか、では達者でな」

ヴィクトはリーゼロッテへと背を向け歩き出してしまった。

リーゼロッテは面白い女だし、美人だし、天然でエロイベントを展開してくれる最高貴族であるが、面倒な人助けに携わる気はヴィクトには皆無だった。

助けられるのならば助けるに吝かせじんかでないが、かといってわざわざ手を伸ばしてまで助けようとは思わないのだ。

まず、彼はただの小説家である。

小説家は人を助ける職業ではない。あくまでお話を書き、それを読者へと届けるだけの職業である。人を助けるために火へと飛び込むのは、ヒーローか貴族の役回りだった。

ひらひらと手を振り、リーゼロツテとの別れを済ませる。――はずだった。

けれど、彼は肩を掴まれて強制的に停止させられた。振り返ると、呆れ顔のリーゼロツテが居た。彼女は「やれやれ」と肩を竦めてみせると、ヴィクトの隣を歩き始めた。

「……………なんだ？ 正義の味方だったら、俺は手伝わないぞ。もし手伝うことがあるのならば、俺はレツドが良い……………」

「結構ノリノリじゃありませんのー！」  
「じゃなくって、とリーゼロツテは咳払いをひとつ。  
「ヴィクト様、貴方様は勘違いなさっているようなので

申し上げますわね？ 貴方様も、わたくしにとっては大切な民の一人なのですわ」

「ほう、つまりは俺を護衛する、と？」

「当然ですわあ！」

びしっとリーゼロットが決めポーズを披露した。ちよつと格好良い。

本音を白状してしまうと、まったく要<sup>い</sup>らない。余計なお世話もここに極まった感がある。ヴィクトには自分が殺されない自信があつた。

——奥の手があるからだ。

むしろ、彼女と共に行動するということは、こちらが護衛する側に回ることを意味する。



それは非常に面倒だった。

が、同時、リーゼロッテは悪くない奴やつである。見捨てるのには惜しい人材だと思うし、なんだかんだ一緒に居れば刺激的で面白いかもしれない。あとエロい。

少し悩んだ末、ヴィクトとはある質問をすることにした。

「リーゼロッテ、読書は嗜たしなむか？」

「ええ、貴族グレース・オブリージュ的教養ですわよ」

「そうか、意味はよく解らないが……ちなみに、お前。

小説家のヴィクト・ファニーという名に覚えはあるか？」

「ありますわね。わたたくし、彼の作品の大ファンで……  
って、貴方様もしかしてヴィクト様でして!?! うっそ、

わたくしファンですわよー！」

「え、ほんとお？」

「……急に□調変わり過ぎすですわよ？ こっちが『ほんとお？』って言いたいですわ」

「こほん。——で、お前。本当に俺のファンか？」

「いえす、ですわあ！ デビュー作の『ボンレスハムの些ささい細な恋』からのファンです」

そうかそうか、とヴィクトは満足げに何度も頷いた。

□元が止められないほどに弛しかん緩かんしてしまう。

——彼女が俺のファンであることはまったく、まったく以もつて関係ないけれど、なんとなく暇ひまだったのも事実である。時間もある。少しばかりならば、助けてやらな

いこともなくはない、ような気がしないでもない。  
ヴィクトはリーゼロッツテに協力することを決めた。

▽ 催眠術師 椎名フラン

「最悪うー。ね、ね、お母さんもそうは思わないー？」

「あなた貴女は私の娘よ。貴女は私のむす、め、よ。あ、あな、  
た……」

「むうー、ほんと最悪。お母さんまで壊れちゃったぽ  
い！」

ふえーんと幼い少女は泣き喚わめいた。

その少女の名を椎名しいなフランという。十二歳の育ち盛り  
であり、活発な赤の頭髪をサイドテールにして垂らして

いるのが、より彼女の性質を表現している。フリフリのゴスロリ風衣装がとてもよく似合っていて愛らしい。が、その愛らしさは外見だけの飾りに過ぎなかつた。彼女の本質は闇やみに染まりきっていた。

フランはお気に入りの腕時計——ハートの形をして  
いる上、針の先端までもがハート型である——を確認し、  
きつちりと五分だけ泣くと、ぴたりと涙を止めて見せた。  
そして、

「ざあーんねえーん。今回のお兄ちゃんはお気にだつたのになあ。フランちゃんにはもつと良い出会いがあると思うから、じゃあね、元お兄ちゃんたちいー」  
あつさり、と。

さつきまでは兄と慕っていた死体を踏ん付けて、ダンスホールを後にした。

「元お兄ちゃんと元お父さんが庇<sup>かば</sup>ってくれたお陰で命拾いしちゃった。けどお、フランちゃんをびっくりさせた罪は重いよお。ようーし、皆殺しにしてやるう」

ぐいっとガッツポーズを決めつつ、フランは黒を基調とした廊下を歩いた。豪華飛空船というだけあり、かなりの広さを誇っているらしい。

とはいえ、あくまでも船。

そこまでの長さはなく、子どもでもあるフランでも難なく走破できる……かに思えたが。

「まさか、封鎖されてるだなんてね。酷<sup>ひど</sup>いなあ」

先に廊下が続いていったであろう道に、突如<sup>とつじよ</sup>として壁<sup>シャッター</sup>が出現していた。

フランは左右の壁に設置されている監視カメラを覗<sup>のぞ</sup>いた。どうやら、人工知能による防衛システムとやらが起動した所為で道が封鎖されてしまっているらしい。犯人たるテロリスト集団が殲滅<sup>せんめつ</sup>されぬ限り、この封鎖は解けないのだろう。

が、それではフランが困ってしまう。

今の彼女はひとりぼっちである。とても寂<sup>さび</sup>しい。

やはり、家族は大切だとフランは実感を持って知った。

昔の母親——初代の母親だ。正義感が強く、胸が大きかった——が口を酸っぱくして言っていたのを思い出

す。

『家族とは何時いつ如何いかなる時も愛し合い、助け合うモノです』

まったくその通りだと思った。

ゆえに、幼く非力な少女には家族てふだが必要だった。

フランは涙目で、無機質な監視カメラへと訴えかけた。  
両手を重ねて握り、如何にも殊勝しゅしょうですと伝えるように、

愛らしい仕草でおねだりをした。

「おねがーい、人工知能さーん。フランちゃんねえ、お父さんとお母さんとお兄ちゃんが死んじゃって困ってるの。それに一人は怖いし危ないでしょう？ もしかしたら、別の場所で避難してる人とか居たらあ、フランち

やんをそこに連れて行って欲しいの」

ね、ね、ねとフランは何度もお願いした。

その願いは存外、簡単に叶えられた。目前を塞いでい

たシャツターが無言で開いた。それから、次々にシャツ

ター群が稼働して道を譲ってくれた。

フランはパツと表情を明るくすると、スキップの足取りで先を急いだ。

しばらく進むと、けれどフランはクタクタになった。

彼女は基本的にはインドア派であり、自宅に引きこもってゲームをするのが常である。ゆえに、歩くのは好きではなかった。

床に座って鼻歌を歌っていると、見かねた人工知能が



ドラム缶を寄越した。

《お客様、椎名フラン様。自動でお運び致しますので、この全自動お掃除ロボットにどうかお乗りください》  
 「渡りにドラム缶ね。ね、ね……最近の人工知能さんつてすっごおい！」

歓喜に万歳ばんざいしてフランはドラム缶へと飛び乗った。  
 紅蓮ぐれんのサイドテールがまるで意識を持った生き物のごとく揺れた。

ドラム缶の乗り心地は悪くなかった。円柱型のロボットの上に居ると、なんだか自分の身長が伸びたように感じる。普段、自分がどれだけ矮小わいしょうで、そして取るに足らない存在なのかを教え込まれているかのようにある。

フランは弱い。

そして、世界は弱いフランのことなんか気には掛けてくれない。

いつだって助けられるのは家族だけである。だからこそ、フランはできる限り、家族に囲まれ続けている必要性があった。そうでなくば孤独だから。

家族さえ居れば安心できるのだから。

昔、彼女が見ていた世界的なアニメーションの、よく髪の毛がないと誤解されてしまっ、金髪の男の子も言っていた。安心とは、車の後部座席で眠ることなのだ、と。

フランはその意見に全面的に賛成だった。

早急に家族が必要だ。それもたくさんの、そして有能

で優しくて温かくって、フラン好みの容姿を持つ家族であれば尚なおさら更良い。

ドラム缶の移動能力は思いの外高く、階段もすいすいと登り切ってしまった。

この豪華飛空船ヴィクトリア号はエツフェル塔を横倒しにしたような全長を誇っている。四階層と甲板かんぱんとで構成されており、縦方向にもかなりの面積を持つ。

一階はロビーを中心としていて、その付近には娯楽施設が充実している。

二、三階には比較的安めの部屋——VIPになれなかつた金持ち一般客が泊まる

のだ——が無数に並んでいて、端の方にはスタッフが休む部屋もある。もちろん、この階層にも窓があつたり、

売店があつたりと十分楽しめめる要素は詰め込まれている。部屋の造りも中々だ。

そして四階がこの船でも最上級の階層となっている。一部のVIPしか宿泊できなない、豪華にも過ぎる部屋がある。いわゆる、スイートルームというやつだ。その他にも、ゲスト専用の特別室だつたり、謎なぞの会議室だつたりと盛りだくさん。中央には巨大シアタールームもある。それから甲板である。

ヴィクトリア号は飛空船じゅうおうむじんというだけあつて、空を縦横無尽じゅうおうむじんに駆け回る。飛行機ではなく、船の形状をしているので、まるで雲を泳ぐようだ。

ゆえに、甲板から見やる景色は——絶景だ。

足下には仄ほのかに雲がかかり、眼下には一面のもくもくの雲が揺蕩たゆたっている。時折、雲が晴れた暁あかつきには、広大な蒼海が何処までも何処までも広がっているのだ。この光景が見られるのは天才科学者の頭脳たまものの賜——与圧や動力の問題を解消した——で、感謝しなくてはならない。フランはこの船にヴァカンスのつもりでやって来ていた。特に荒事をするつもりもなく、ただの家族旅行を目的として気軽にやって来た。たしかに、乗船券を得るための方法は暴力的だったが、それも今は昔のことである。フランは忘れっぽいのだ。

……意図して、と枕まくらが付くのだが。

《フラン様》

ぼーっとドラム缶に搭載されていたフランへと、不意に人工知能が語りかけてきた。

《船の旅は快適でしよるか》

「んーつとねえ。まあ、そこそこかなあ。ちよつと喉が渴いたかもだけど、ね、ね？」

《かしこまりました》

ドラム缶がいったん停止したかと思うと、遅れて向こうの方から別のドラム缶が姿を現した。そのドラム缶をテーブルのようにして、コップいっぱいのにジュースが視認できた。

「わお」

《ヴィクトリア号の完成記念を祝して、特別に作られま

した、記念ジュースでございます。本来でしたらば、初日のダンスパーティーで振る舞われる予定でしたが」

「残念だったねえー。ところで人工知能ちゃん、あなたのお名前はあ、なんというの？」

《私はアイギスシステムと呼称されております。どうか、お気安くシステムちゃんとお呼びください》

「アイギスの方じゃないんだあー!？」

意外とお茶目な人工知能に、フランはこの日一番の驚愕きょうがくを見せた。

記念ジュースはとてもとても美味おいしかった。甘い蜜みつを凝縮させ、それでいて爽さわやかな液体としてすんなりと飲める。蜂蜜はちみつ色というのもポイントが高く、フランはそれ

をぐいぐいと飲み、じゃんじゃんとお代わりを要求した。アイギスの方も、興が乗ったのか、かなり奮発してくれている。

在庫処分とも言う。

そうこうしているうちに、三階の小ロビーへと到着した。ここには、本来ならば三階に宿泊する予定だった人間たちがぎゅうぎゅうに集められている。なるほど、集団を護衛するのであれば理想的とも言える効率の良さである。

こういう時、もつとも恐れなくてはならないのが、パニックに陥った人間が逃げ出すことである。一人が逃げ出せば二人が逃げ出し、それはどこまでも連鎖する。



そうならばテロリストたちの思う壺つぼである。

フランは、ドラム缶に過度なまでの武装が積みまれていることを知っている。それだけの兵器を搭載し、その上に頑強なボディ、死を恐れぬ精神を持つドラム缶は恐るべき力を持つ。

どう見てもオーバーテクノロジー。アイギスシステムやヴィクトリア号を設計したという博士は、ダークマタ教授の名で世界に認められ、警戒されているという。

並のテロリストでは逆立ちしたって勝てっこない。大人しく守られているのが吉である。

フランもそうしようかとしばし迷って、しかし内心で首を左右に振るった。

たしかにアイギスシステムは優秀だが穴がある。実際、殺人事件をひとつ見逃しているわけだし、テロリストたちが起こすまで動きを見せなかった。

ハッキングが可能なのは未知であるが、誤魔化す方法はあるのだろうか。

それに何より、アイギスシステムは家族ではないのだから。

ゆえに、フランはドラム缶の上に起立した。そうして、眼下で恐怖を顔に貼り付けた金持ちどもを見やっつて——  
—こう囁いたのだ。

「ねえ、ね。……フランの家族になつてえ？」

瞬間、人々の意識はフランの手中に収まった。  
稀代きだいの催眠術師さいみんじゅつし。

怪物家族椎名ファミリアの長女。

それこそが椎名フランを表す、裏社会での通り名である。裏の社会の誰もが彼女のことを畏怖いふし、恐れ、距離を取る。——彼女に意識を篡奪さんだつされぬように。

かくしてヴィクトリア号には、新たな勢力が突如として出現するのだった。

豪華なシャンデリアが照らす、明るい船内の中心にて。  
椎名フランの瞳だけが妖あやしく暗闇くらやみを湛たえていた。

▽ 邪教主 パネロペ・ドア

「まったく、この船はいったい何と戦うことを想定してんだよ！ 過剰戦力にもほどがあんだらうがつ！」

ドラム缶の大群は、厄介な壁として立ち塞ふさがってきた。しかし、こちらにも歴戦の宗教家である。念のための対策は十分に用意してきていたので、対抗手段は枚挙いとまに暇がない。……それでも戦況はようやく五分、といったところだが。

対抗策のひとつ、小型爆弾を投擲とうてきし、ドラム缶のひとつを爆破した。

当然、小型といえど破壊力は折り紙付きである。頑強なはずの床に穴が開く。真下では機械仕掛けが、複雑に

稼働していた。それを見下ろしながらパネロペは叫んだ。「おら、くそAーども！ このまま船を強引ごういんに落とされたくないやあ、ここは引きな？ 床がなくなっちまうのは怖えだろう？」

《…：警告、警告》

「うるせえ。ほら、あとで合流しようぜえ？ ここで潰つぶし合うのはお互いに不本意だろうがよう。とはいえ、こちとら邪教徒よ。《ヒルゲヨルゲ》様に奉仕する気満々で、あんたらに特攻するっていう選択肢もあるにはあるんだぜ？」

《上層で会いましょう》

「ああ、あと、オレたちが通る場所のシャッターは開い

とけ？ いや、閉じてても構わねえけど、その場合、船が落ちる覚悟をしな」

《かしこまりました》

アイギスシステムはふて腐れたようにぼそりと呟くと、一斉にドラム缶たちを撤退させた。あとに残されたのは、派手な戦闘の余韻だけである。

「やりましたね、教主」

歓喜の滲んだ声音で、邪教幹部の中でも唯一の女性信者、八番がパネロペに抱きついてきた。司祭服の下に隠された、巨大な双壁が、ぐにゆりと形を変えた感触がした。

パネロペは鬱陶しそうに彼女を受け止めると、憂鬱げ

に俯いた。

「アイギスシステムに話が通じるのはリサーチ済みだ。最悪、あいつらを敵に回しても勝てるくらいには武装を用意してある。が……あいつはヤバい」

「あいつ、とは？」訝いぶかしげに八番が言った。「先の岡田米助とやらですか？ この八番めが直々じきじきに奉仕させに行きましようか？」

「やめとけ。返り討かえちにされるぞ？」

「八番は武装をしております」

そう言って八番はパネロペから離れた。そして、肩から提さげたアサルトライフルを、玩具おもちゃをもらった子どももみたいに掲げて見せた。立派な武器である。また、手を拳

げたことによつて強調された胸部に至つては更に立派である。

はだけられた司祭服の下には、薄手のワンピースが覗いている。残念なことによつて、身体にはダイナマイトが大量に括り付けられているので色気も何もあつたものではないが。

「無駄だ。岡田の野郎は老人なんだからよ」

殺し屋の老人、というのは異常を乗り越して異形の階位にまで達している。

殺し屋というのは基本的には使い捨ての消耗品である。特に、米助のようなフリーのアサシンは一回でもミッシェンを達成すれば、しゅくせい 肅正対象に落とされる。



殺し屋を用いるような後ろ暗い人間とはいえ、おおつ  
ぴらに殺し屋を使つたとなれば風聞ふうぶんに関わるかか。いつたん、  
一瞬とはいえど、組織内に加入させる必要性から、情報  
が漏れ出ることも十分に考えられる。

何よりも、依頼人の情報を知っているということは、  
他の誰かに元依頼人の始末を要請された際、有利に動け  
るということにも繋つながりかねない。

だからこそ、フリーの殺し屋を使つた後は、お抱えの  
殺し屋なり部下になり始末させるのが通例であつた。  
だというのに岡田米助は生き残つた。

彼が初めて任務をクリアしたのが五歳の時だつたとい  
う。今の彼はもう優に八十は超えていて、未だいま現役で第げんえき

一線を歩き渡っている。

その異様さ、異常さたるや。

パネロペは薄ら寒さを感じ、ぶるりと震えた。

「あいつの殺しはマジックだ。身体能力的に衰えたって  
いうのに、殺しの腕は年々上がっているそうだ。じつに、  
オレらの宗教に加入してもらってえもんだよ」

「この八番、勧誘してきます」

「無駄だよ。あいつは死ぬのが怖えんだ。だから、オレ  
らの宗教には全然合致しねえよ」

「しかし、この八番、中々のボインちゃんです。この肉  
体を用いれば男の籠絡など容易いことあります」

「あんだ、爺の性欲を過大評価しすぎだ」

無駄であると言っているのにもかかわらず、八番は自らの胸を両腕で挟んで強調し、己が巨乳の有用性を語っている。

パネロペからすると、巨乳だろうが貧乳だろうがどうでも良い。

要は、人間……顔である。

八番の容姿、体つきはかなりナイスと言えるだろう。顔だって整っている方だと思う。しかし、どうにもパネロペの好みではなかった。

パネロペにはずっと心に決めた、好きな女がある。その女はどこぞの馬の骨とも解らぬ金持ちに奪われてしまったが、今でも彼女はパネロペのことを想っているはず

だ。

と。少なくともパネロペはそうもうしん盲信している。

『結局、世の中お金なのよ、パネロペ』

そう言っつてパネロペの元を去っつて行つた彼女のことを今でも思い出す。あれは彼女なりの気遣いであつたに違いない。本心ではそう思っつていなくとも、パネロペがこれからの人生を心置きなく過ごせるようにという配慮であつたに決まっつているのだ。

パネロペは他者の気持ち解らない。

すべてを自分基準で決めにかかっているからだ。ゆえに、自分が愛する相手は決まっつてこちらを愛していると思ひ込み、自分の幸福と同条件で他者が幸福を感じると

考えている。

彼ほど、邪教の教祖たりえる人材もそうそう見受けられない。

が、そのような彼に救われる人間は多かつた。

特に、目の前でまだセクシーポーズをとって「うふんうふん」言っている八番などは、ことさらそれが顕著である。八番自身はそこまで熱心に《ヒルデヨルデ》を信仰しているわけではないが、彼女は強くパネロペに心酔している。

元々、八番は奴隷どれいだつた。

多くの国や地域で奴隷制度は禁止にされているが、それはあくまで禁じられているというだけのことであり、

あるところには普通にある。八番はその被害者の一人だった。

それを救出したのが邪教の面々であつた。

邪教は過度な裕福を許さぬが、過度な貧困をも許さない。平等を信仰の地盤とする邪教のモットーは「全員の救済」であり、これまでも八番のような人物は多く救つてきた。

すべては自分のためだけに……。

「で、早速上を目指そうぜ。操縦室を占拠しちまえばこっちのもんだからよ」

「途中のアイギスシステムはどうなさるのですか？」

「もちろん、真正面から叩き潰す。何人が奉仕すること

になるだろうが、構うことじゃねえ。最終目的だけは確  
実に完遂かんすいしてみせるぜ」

「……解りました」

邪教たちが進む道はモーセを彷彿ほうぶつとさせる勢いで開い  
ている。アイギスシステムがきちんと約束を遵守し、彼  
らを堰せき止めるシャッター壁を排除してくれているのだ。

ここは一階である。

一階の床に穴が複数生まれるのはまずい。が、ことが  
二階いっさいくらいになってくると、アイギスシステムの方も  
一切いっさいの容赦ようしやをしてこないだろう。今はボーナスタイムだ  
と思ふべきだ。

だから、邪教たちは安心のうちに、ヴィクトリア号の

廊下を我が物顔で走破していった。赤の絨毯じゅうたんが敷かれ、左右の壁は黒く塗られている。頭上をほの灰かに照らす、薄暗い照明が上品に明滅を繰り返している。

何者も我らの歩みを止められない——と油断しきつていたその時。

「……っ！ 総員、避よけるお！」

突如として左右の壁がぶち破られた。

反応が遅れた五番の頭部が石榴ざくろのように破裂した。

——横合おうだいから殴打されたのだ。

「マジかよ、ファンタジーかよ」

そう独りごちたパネロペを笑う者はいない。

彼らの前に出現したのは二人の男だった。どちらも仕



立ての良い、邪教徒が唾棄<sup>だき</sup>すべき着飾りを身に付けていたが、それすらも目に入らない。

それより何より、男たちの状態が尋常ではなかったからだ。

顔面は醜<sup>ゆが</sup>く歪<sup>ゆが</sup>んでいる。口内に収められていない舌先からは、絶えず唾液と血液とが垂れている。目と鼻からも流血が止まらない。

酷い、血の臭い。

壁を殴つてぶち破り、近くに居た五番の顔面もまた殴り潰<sup>つぶ</sup>した男の右腕は、ぐにやぐにやにひしゃげて壊れている。足もどうやら砕けているようなのに動いていた。

映画で観<sup>み</sup>るアンデッドを彷彿とさせる。

「どうしますか、教主」

唯一、冷静に銃を構えていたのが八番であつた。彼女の声によつて冷静さを取り戻したパネロペは、舌舐めずりをした。

「――さあ、布教を開始するぞ」

瞬間、四方八方から銃弾の雨が炸裂した。異形の男二名の全身に風穴が開き、血飛沫が赤の絨毯をグロテスクへと染めてゆく。残つたのは二つの肉片であつた。

「まったく、こいつらは何者だ？ 素手で壁をぶち抜くなんて人間と、は……？」

パネロペは思わず絶句してしまった。

目の前の肉片が立ち上がったから。

もはや、腕は完全に千切れ、足も片方しか残っていない。残っていると言っても、それは辛うじてくつついて  
いるだけ、と形容すべき有様だ。あひさまだというのに動く。  
それは動く。

「いも、うと、まも、まる」

何処が口かも解らぬ状態で、しかし怪物は言葉を紡つむいで  
だ。

「妹、かわ、かわいい。かわいいいつもる。兄だからだ。  
兄だからだ。兄だからだ。兄だからだ。兄だからだ。兄  
だから……ぼくはめいたんていつ！ はんに、は……」

「なるほど、イカしてやがる。……八番、いくぞ」  
「はい」

同時に二人は前へ出た。

怪物がその肉塊を蠢うごめかせる。鋼鉄の壁すらをも粉碎してみせる肉体が、一挙にパネロペたちへと襲いかかってきた。

視認すら困難な、死の一撃。

だが、パネロペは口元に笑みすら浮かべ、その一撃へと突っ込んだ。

常人であれば目でも閉じてしまいそうな、凄惨せいさんな惨劇が作られる——ことはなかった。

後方で控えていた信者の一人が爆弾を投げ、怪物の肉

体を吹き飛ばしたのである。そこへとパネロペは追い打ちを掛け、怪物の肉体へと腕を突っ込んだ。

「奉仕してこい、おら」

腕を引き抜きバックステップ。

離れた瞬間に起爆スイッチを押し込んだ。

——轟音。

肉片すらも残さず、怪物の一体が四散した。

一方の八番はといえ、もう一体の怪物の攻撃を紙一重で<sup>かわ</sup>躲していた。微かに<sup>かす</sup>掠ったことによつて頬の肉を持つて行かれながらも、彼女はがら空きとなつた怪物の肉体へと銃弾を叩き込んだ。

銃口を直接ぶつけながらの、無遠慮の大連射。

採掘機でも用いたのかと疑<sup>うたぐ</sup>りたくなるほどの大音声<sup>だいおんじょう</sup>。  
肉片の欠片<sup>かけら</sup>すらもミキサ―した銃弾は、たつぷり二十  
三秒もかけて空となつた。

八番は弾のなくなつたアサルトライフルを投げ捨てる  
と、心底疲労したかのようにその場に崩れ落ちた。肩で  
荒い息をしつつ、現状の確認を求めらる。

「教主、武器の残りは大丈夫ですか？」

「ああ、もうじき隠してある場所に辿り着くさ。死亡者  
も思ったより少ねえくれえだ。これも全部が全部お前た  
ちの、特に八番の頑張りだ。これからも頼む」

パネロペがそうやって<sup>ねぎん</sup>労うと、途端に信者たちは活力  
を取り戻した。□々に互いの信仰を<sup>たた</sup>称え合い、計画の完

遂と、自らの死が近付いていくことに胸の高まりが抑えられていない様子だった。

パネロペがその彫りの深い顔立ちを、和らげた。

「変な化け物にだつて、オレらの信仰は止めらんねえ」  
邪教徒たちは一斉に喝采かつさいをあげた。

赤の絨毯と肉片の上に立ち、歪いびつな笑いをあげる彼らは……まさしく邪教徒であつた。

▽ 幸運 アレイスト・グッドマン

とても騒がしい、とアレイストはぼんやりと廊下を歩いていた。

時折響いてくる爆発音に似た何か。獣が無思慮に走り

回るかのような野太い足音と、これまた獣じみた怒声とがたくさん耳を劈つんぱいいた。

アレイストは現状をまったく理解していなかった。

この船にテロリストが出没していることも、それに応戦している人工知能がいることも、そして何やら怪物へと変化してしまった人たちが暴あばれ回っていることも、また知らない。

何故ならば、アレイストはこっそりとダンスホールから脱出していたからだ。

リーゼロッツテと名乗る美少女がやたらと目立っている最中、彼は普通に歩いてダンスホールから出て行ってしまった。彼の影が薄いわけでは決してなく——アレイ



スト自身はハリウッドスターにだって成れるくらいの美形である——彼女が無駄に目立ちやすいただけだ。

が、アレイストはその事実気が付いていない。

「まさか、ぼくに『じゃぱにーず・ニンジャ』の才能があつたなんてねえ」

だなんて本気で思っていて、自らに隠密活動の才能さえ見つけ出していた。

そのような彼が船内を何気なく歩いているのは、他の人々とは異なり、純然たる観光気分である。豪奢ごうしゃな作りの飛空船の内装を見られる機会はそうやって来ない。だから、これを機に堪能しようと、アレイストの中の庶民が主張したのだ。

「しかし、うん。変だねえ」

さきほどから不自然に通路を塞ぐシャッターが出現する。その多くはアレイストが通ろうとすると、謎の火花を散らして消滅するのだが……しかし、偶たまに不動のシャッターもある。

これが防災対策のシャッターであることは知っている。また、これが豪華飛空船ヴィクトリア号に搭載された、超高性能防衛人工知能アイギスシステムにより管理、操縦されている事実も知っている。

さつき偶然拾ったパンフレットに書いてあった。

だとすると、何故、今動作しているのだろうか……とまで考えたとき、アレイストは自らの犯行——厳密に

言うところではないのだが――を思い出した。

（もしかしてぼくを追ってるのかな？ ……なんて凄<sup>すご</sup>いんだらう。ぼくの犯行が明るみに出たことなんて一度もないのにさ。人工知能って凄<sup>すご</sup>い！）

アレイストは純粹に感心していた。

というよりも、彼は人類という種族に酷く失望しているのだった。人間はどれだけ集まってもろくなことをしないし、特に何かができるわけでもない、と。

アレイストは超常能力に類するような幸運を持っている。幸運の星の下に生まれ、それから的人生をまったく躓<sup>つまず</sup>くことなく歩んできた。

たとえば、お金がなかった時。スクラッチ式の宝くじ

を**買**えば幾らでも当選するし、そうでない宝くじだって小遣いこづかをもらうくらいあさこの感覚で一等を当てることができると。自販機を漁れば白紙の小切手を見つけた始末だ。たとえば、喧嘩けんかの時。彼が拳こぶしを一度握れば、相手の頭上には雷が落ち、何もせずとも勝利が確定した。たとえば、百メートル走。彼は諸々の事情もろもろでオリンピック選手と競争し勝利せねば殺されるという状況に追いやられたが、敵が偶然アキレス腱けんを断裂して選手生命が絶たれたことによつて、歩いて勝利をすることができた。……ともかく、アレイストにとつての人生とはゲームよりも簡単な、ただ生きていくだけで一人勝ちの、味のないガムに過ぎないのだ。

いや、アレリストにとってはゲームすら簡単だ。いつも、彼が負けそうになると勝手にバグって勝利になるのだから。ソシヤゲでガチャを引けば毎回最高レアである。

人生は退屈。

人間は窮屈<sup>きゆうくつ</sup>。

底が浅い、呆れる<sup>あき</sup>ような生き方しかできない愚物である。見ていてまどろっこしいし、どうやったって自分が勝つのだからくだらない。

が、今回、中々面白くなってきたのではなからうか、とアレリストはウキウキした。

人間には心底失望しているが、人間が作った人工知能というのは完全に盲点であった。

アレイストはかつてプロ棋士きしと対局した際、相手が爆睡してしまい、どんなに起こしても起きず、時間切れで勝利を収めたことがあった。

が、人工知能であればそのようなことにはならない。ハードなりなんなり壊れるかもしれないが、その頭脳を上手うまくいかせば、億に一つ、兆に一つ、アレイストを上回る目があるかもしれない。

「これは楽しくなってきたなあ」  
にわかには楽しみになつてきた。アレイストはその興奮を抑えるために自販機へと手を伸ばした。すると、機械は盛大にショートの声を上げ、中から大量の缶ジュースを吐き出し始めた。どうせ小銭は持っていないなかったので、

ありがたく頂戴ちよつだいしておく。

コーラで喉を潤し、これからの計画を練る。

人工知能がどうやったら自分を下せるのか。ちよつとでも相手有利の局面へと持って行ってやらねば、先の自販機みたく、あっという間に壊れてしまおうだろう。

うんうんと悩んでいると、催もよおしてきた。

ちよつとトイレが目の前にあつたので入ろうとして、アレイストは驚愕の事実を知る。なんと男子トイレの方に『故障中』の文字があつたのだ。

アレイストは少々動揺した。

自分がトイレに行きたいタイミングでトイレがあるのはいつも通りだ。だが、それが故障しているだなんてこ

とは初体験である。もしや、運が落ちてきたか、と喜んでいると、隣の女子トイレが目に入ってきた。

「ああ、そういうことか」

今、人は居ないらしい。

なんらかのイベントが開催されているのだろうとアレイストは睨んでいた。さきほどから鳴っている爆発音は、もしかすると甲板で花火でも打ち上げている音なのかもしれない。しれぬと思い始めていた頃だった。

今、トイレに入ってくる者は居ない。

それは即ち、アレイストが女子トイレに侵入しても誰にも咎められない、ということの証左ではあるまいか。

——女子トイレ、それは男子禁制の魅惑の園。男子た



るもの、一度くらいは足を踏み入れておきたい、聖域。

ごくりに、と柄からにもなく喉が鳴る。

近くには誰も居ない。精々せいせいが監視カメラが一台、ショートして壊れているくらい。

アレイストは魅惑の園へと足を踏み入れた。

▽ 令嬢 リーゼロツテ・M・グレースネス

リーゼロツテは土下座していた。

理由を述べるのには少しだけ時間をさかのぼ遡らねばならない。

あれは、共に行くことを決めたヴィクトと共に雑談をし、友好を深めていた時のことである。

何気なく、リーゼロツテは尋ねてしまったのだ。

『そういえばヴィクト様。貴方様は中々よろしい方のように思いますけれど、どうして死体の写真をお撮りになつてしまったの？ 小説の取材みたいなモノでして？』

『いや、あれは証拠を集めていたただけだ』  
『証拠、ですの？』

『ああ、あれだけ人がたくさん居ると、死体に触つたりする者が出るかもしれない。あの時、あの瞬間はあの死体だけが事件解決へのヒントだった。ゆえに、犯人が何かをすることも考慮に入れていた』

だから、彼は死体の写真を撮り、状況の保存に努めたのだ——と耳にした瞬間、リレーゼロツテは一も二もななく土下座していた。長い縦ロールの金髪が床にだらりと

垂れ下がりに、なんだか変な生き物の様相を呈<sup>てい</sup>しつつあった。

そして今に至る。

「申し訳ありませんでしたわあ！ わたくしっただらヴィクト様のことを同性愛者のネクロファイリアだとばかり思っていましたわあ！」

「その事実を告げられたことが、一番の衝撃なんだが……」

「ビンタしてしまっただけで申し訳ありませんでした！ どうにか、わたくしにも酷いことをなさってくださいまし！ えっちなことも可！ さあ、さあ！」

「いや、お前の世界観について行けない……」

「さあ、ぶつてくださいまし！ はあはあ」  
リーゼロッテの目はやや血走っていた。興奮も少々窺<sup>うかが</sup>える。

ヴィクトが数歩、後じさる。

「さてはお前、エムだな……？」

「はい、わたくしはリーゼロッテ・M・グレースネスですわよ？」

「いや、そういう意味じゃないんだが……」

「ともかく、わたくしは貴族として謝罪いたしますわー！」  
<sup>ノブレス・オブリージユ</sup> 貴族的謝罪っ、とリーゼロッテはやたらと騒ぐ。とり

あえず、リーゼロッテは全世界の貴族に謝罪すべきだと思われた。が、もちろん彼女がそのようなことに思い当

たるわけもなく——実のところ、彼女の両親も、彼女の教育には匙さじを投じている——謎の持論を終始繰り広げた。

多くの人間はリーゼロッテと相対すると困惑するのだが、むしろヴィクトは表情に笑みらしき皺しわを刻んでいた。

「まあ、構わないさ。美少女に不意打ちでビンタされる経験は貴重だ。ひとつ、良い経験をさせてもらったと思っ  
つておこう」

「ありがとうございますわ！ ヴィクト様がドエムでよ  
かったですのっ！ お礼にもう一度ビンタして差し上げ  
ましようか!？」

「こわ」

ふんす、とリーゼロッテは鼻息荒く言った。美人が台無しである。彼女は中々の残念な美少女であると言えるだろう。人形のように整った凜々しい顔立ちも、こうコロコロ表情を変えられてしまつては形無しだ。

ヴィクトがリーゼロッテを睨み見てきた。彼の目付きは非常に悪い。そこに悪意がなくとも、自然とそういう風になつてしまふのだろう。

……睨む気はなくとも、だ。

が、リーゼロッテは彼の視線を心地良く受け止めていた。彼女はヴィクトという男性に好感を抱いている。彼は誤解されやすい人間なのだろう。しかし、それでも腐ることなく、善良であり続けた。

ビンタの件も快く許し、自らが理解できない価値観を理解できないながらに許容する器の広さも見せつけた。爆発の時にもリスクを冒してまで救ってくれたし、その後、護衛たちの全滅に悲嘆した時にも不器用なりに慰めてくれた。

無力ながらに誰かを救いたいというリ zeroes の我<sup>わ</sup>が儘<sup>まま</sup>も受け止めてくれた。地味に彼女のことを護衛しようとしてくれていたことにも気が付いている。

また、一緒に並んで歩くとき、歩く速さを合わせてくれているのもポイントが高い。

意外とヴィクトは女性のエスコートに慣れている様子だった。

リーゼロッテは自らが貴族であるという点に強い誇りを持ち合わせていたが、同時、一乙女いちおとめとしてお姫様扱いにも憧れあこがを抱いていた。

奔放ほんぽうなリーゼロッテを女性扱いしてくれる男性は稀少きせうだ。

その上、目付きの悪さも素晴すばらしい。あの目で見つめられ、まるでゴミを見るかのような目——グイクト自身にはそのような意図はない——で見られる度たび、リーゼロッテは未知の快楽が背中に迸ほとばしることを発見した。あの目付きが堪らなくゾクゾクを誘うのだ。

このようにリーゼロッテが吊り橋つばし効果に踊らされ、自らの内なるチヨロほんろうさに翻弄ほんろうされている間に娯楽施設へと



辿り着いた。

「やっと廊下以外の景色を見られましたわね」

「そうだな。シャッターが下りている所為で、随分と迷わされたよ」

「ですわね。特に、ヴィクト様は来た道を引き返そうとしますものね」

「……察しろ。俺は方向の神に見放されているんだ」  
娯楽施設も当然のように設備が充実している。

ここは一種のゲームセンターのようなモノなのだろうか。アーケードゲーム機やクレーンゲーム、他にもよく解らないゲームが所狭しと並べられ、独特のピコピコとした光を明滅させていた。

また、少し離れた場所には卓球台、ダーツ、そしてビリヤード台もある。

リーゼロッテはその中でもビリヤード台に近付くと、作りの良いキューーービリヤードに用いる、球を突く棒のことだーーを手に取った。長さは大体一メートル半、細長く、意外と重い質感をしていた。

軽く振ってみる。悪くない。

「どうかしたのか？」とヴィクトが首を傾げた。

「今は非常事態だぞ。ビリヤードで遊びたい気持ちも解らなくはないがな……まったく、一試合だけだぞ」

「なんでノリノリなんですのっ！」  
リーゼロッテは抗議した。

「わたくしがこのような状況で遊ぶわけがございませんわ。これは貴族的武器ノブレス・オブリージューとして、護身用に持っただけですの」

「なんだ、そうか」

ヴィクトは腕まくりしたのを元に戻すと、項垂うなだれてそっぽを向いた。かわいい。少なくともリゼロツテはそう思って頬を綻ほころばせた。

「この船での旅が無事に終わりましたら、是非とも対戦しましょう」

「……ふふん。良いだろう。その時は俺にルールを教えてくださいくれ」

「知らないのにあんなにノリノリでしたのー!？」

リーゼロッテは戦慄せんりつした。自分もよく「扱いが難しい」と言われて凹へこまされたことが多々あるけれど、ヴィクトも相当に扱いの難しい人間であるらしい。思わぬ所に共通点を見出し、リーゼロッテはちよつとだけご機嫌になった。

ちよろい。

ともかく、武器の調達ちよつじようが済んだことは重畳である。リーゼロッテは貴族的作法グレース・オブリージュの一環として武術も嗜たしなんでおり、才能にこそ恵まれなかったものの、その腕はそこそこの域に達している。彼女が得意とするのはフェンシングであるが、キューを用いた槍術そうじゆつもできなくはないだろう。

重火器持ちのテロリストに対抗する武装としては心許こころもとない。それでも、何も持たぬよりは幾分もマシと言えよう。

「ヴイクト様は何か武装なさらないのです？」  
「ふふん、俺に武器など不要だ。なに、お前は何も心配しなくて良い」

少々遊びたい気持ちに後ろ髪引かれつつも、リーゼotteは娯楽施設を後にした。

▽ 殺し屋 岡田米助

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い。

これが米助の平常心であると述べるならば、きつと何

刃かの誰かは嗤<sup>わら</sup>うのだろう。だけれど、米助の胸中にある言葉はいつだって「怖い」の一言だけであつた。幼い頃から彼は何もできなかつた。

日本人として生まれたは良いものの、何歳になつても箸<sup>はし</sup>が上手く持てない。どころか、鉛筆も上手く握れないときたものだ。言葉が話せるようになったのも、四歳の後半であつたといえ、彼の要領の悪さが解ろうモノだ。そのような彼であつたが、たつたひとつだけ才能と呼べるモノが認められた。

それは——人殺しの才能であつた。

フオークでろくに食事もできない彼が、フオークで人を殺<sup>あや</sup>めることだけは誰よりも巧みにできた。歩けば転ぶ

彼も、人を殺すときは誰よりも巧みに動けた。

彼は両親に売られた。そこは児童養護施設を表の顔とした暗殺者養成施設であり、国のお偉いさんが一度限りの手札を育てるためだけに建設した場所だった。

米助はそこでの毎日を頑張りに頑張った。

死にたくないからである。

痛いのが怖かったただけである。

ぶたれるのが怖かったただけである。

ゆえに、彼は誰よりも殺しを頑張り、五歳にて暗殺を成功させた。

そして捨てられた。

それからの毎日は怖くて思い出したくもない。いつも

暗殺される恐怖に震え、殺すことしかできないから殺しの依頼を頑張ってもぎ取り、命ぜられるままに殺した。自分の身を守るためにもたくさん殺した。

五歳からこの方、一度だって油断したことはない。狙撃そげきされるような位置に立ったこともないし、食事の度に毒物かどうかを恐怖し、眠るときはもう目覚められないのではと泣いている。

それは八十を過ぎた今でも変わらない。  
「……怖いモノでございます。特に、気を付けねばならぬのが二名ほど」

米助は思い出した。

自動販売機で右往うおう左往さおうしていたあの時。



まったく油断していない自分の背後をいとも容易く取  
ってきた、あの青年。

理由は解らないが殺し屋としての本能が強く警鐘を鳴  
らした。自分の人生の中で最も敵に回してはいけない人  
物は、こいつだ――と。

他にも化け物がいた。

見た目はどうみてもただの幼女である。が、彼女のう  
ちからは言いしれない闇を感じ取ることができた。あれ  
は怖い。

二人も化け物が居る船なんて今すぐにも降りてしま  
いたい。けれど、彼の仕事人としての側面がそれを良し  
とはしなかった。

米助は殺ししかできない。だから、彼は殺しにしかア  
イデンテイテイを有せない。

殺しを放棄した自分に残るモノは何もないのだ。

それはきつと死ぬということ、死ぬことは何よりも  
恐ろしかった。

（大丈夫でございましょう。殺しのターゲットは幸いに  
して彼らではないのですから。それにいざという時は、  
私にも手札のひとつやふたつありますからねえ）

仕事が上手く行く見通しはあった。ただし、懸念がな  
いと言えは嘘うそになる。それは二人の化け物についてもそ  
うだし、もうひとつ、テロリストたちについても同様だ  
った。

テロリストたちは大した敵ではない。

だが、やつらは明らかに米助へと敵対行動を取った。明確な殺意のもと、仲間の一人を自爆させ、米助の命を取りに来た。

——その事実のなんと恐ろしいことか。

「窮鼠猫を噛むきゅうそと言います。また、殺しをしている最中こそ、もつとも殺し屋は無防備になるといふモノ。自爆されてヴィクトリア号が落とされるのも怖いですからねえ」となると、殺しのターゲットはいったん、変更せざるを得ない。

まずはテロリストどもを皆殺しにし、化け物二人とできるだけ敵対しないようにし、それでいて本命のターゲット

ツトへと接近を試みる。

中々にハードな任務である。報酬と比べるとじつに割に合わない。

しかし、米助が逃げ出すことはなかった。逃げ出した先が地獄であることなど多々ある。逃げ出して無防備な背中を晒す<sup>さら</sup>くらいならば、真っ向から戦って生を模索するのが米助のやり方であった。

そのやり方は誕生以来、一度たりとも曲げたことがない。

「相手が人間であれば、私には必ず勝機がございますとも……」

そう言って米助は影の中に身を潜<sup>ひそ</sup>めた。自らの殺しが

成功することを願い、死の恐怖から少しでも遠ざかるために……。

米助の頭上には、数匹の蚊かが群れていた。

この時。岡田米助は知る由よしもなかった。

自らが化け物と定めた人間が、己がターゲットを護衛しようとしているだなんて、この時の彼は夢にも思わなかったのである。

▽ 催眠術師 椎名フラン

黒塗りの天井は無機質の色を湛えている。アダルテイ  
―な雰か囲だ気を醸し出す照明の近くには、辛うじて視認で

きる程度の羽虫が群がっていた。

それは蚊である。

どうしてこのような季節に、それもこんな場所に蚊が居るのか。疑問は尽きないと思われたが、それを気にできると、椎名フランの精神状態は良好とは言えなかつた。

彼女は魂の抜けたような目で、無心に天井を眺めていた。

まなじり  
眦から零れているのは薄い涙である。

フランが涙する理由はとても単純だが、なんとも言語化し辛い事情を持つ。しかし、敢えて包み隠さずに真実を吐露するのならば、それは――、

「……………まさ、か、この歳でおもらしするなんて  
ね。ふふ、惨め<sup>みじ</sup>」

椎名フラン。十二歳。

まだ恋も知らぬお年頃<sup>としごろ</sup>の彼女は絶賛おもらしの最中で  
あつた。

ことの発端は記念ジュースの飲み過ぎに起因する。彼  
女は浴びるほどジュースを飲み、それが故<sup>ゆえ</sup>に強烈な尿意  
に駆られた。すぐさま、アイギスにトイレへ案内させた  
が、何故だかシャッターが開かなかった。これにはアイ  
ギスも驚いたようだが、とにかく、フランはトイレを目  
前に立ち往生した。  
必死に足搔<sup>あが</sup>いた。





珍しく本気で走った。

だが、結果として彼女はパンツをぐっしよりと濡らし、フリフリのゴスロリを汚し、足下に水たまりを作ってしまった。力なく、彼女はそこに崩れ落ちた。

……。

《し、椎名フラン様。ただいま、迅速じんそくにお掃除ロボットがそちらへと向かっておりますので、どうかご安心ください。お気になさらず》

「……いやいや、普通に考えて無理だから。気にするから。床が綺麗になるとか知ったことじゃないから」  
《アイギスシステム以外、誰も現場を目撃しておりませ  
ん》

「……ちっ、これだから人工知能は！ あんたにおもらしをした少女の気持ち解るう？ 解らないでしょう!?! おもらしでできるようになってから出直して来てえ。ね、ねねね」

《かしこまりました。次期アップデートの際には教授に『おもらし機能』の搭載を申請することと致します》  
「……ぐすっ。馬鹿にしてえ」

▽ 小説家 ヴィクト・フアニー

旅路は順調と言がたい難かった。すべての道はシャッターによって封鎖されていて、行こうと思う道へ進むことができないでいた。

リーゼロッテはかなりまいってしまっただようだ。今すぐにも民を助けに行きたいというのに、壁に遮かざられて辿り着くことすらできないのだから。

露骨に肩を落とすリーゼロッテ。

見かねてヴィクトは彼女の肩をぽんと軽く叩いてやった。

「……仕方がないな。アイギスシステムと敵対するかもしれないが、このシャッターを壊す良い方法がある。いや、その前にアイギスシステムと交渉するか？」

「また断られるに決まっていますわ……」

さきほど、二人はアイギスシステムと対話した。

是非とも乗客を救出したい、というリーゼロッテの提

案は、アイギスシステムによって《それはアイギスシステムの役割です。お客様、リーゼロッテ・M・グレースネス様とヴィクト・フアニー様はお隠れください》とにももなく拒絶された。

しかし、ヴィクトは妥当だとうな判断だと納得していた。ただの人間であるリーゼロッテではテロリストには抗あらがえない。前に出たところで盾たてになるのが精々といったところだろうか。

アイギスシステムの言っていることは正論だった。が、リーゼロッテは正論しだわに拘こらない。間違まちがっていても、己が正しいと思う方へと歩まねば気が済まぬ女なのだ。そして、ヴィクトもそういう彼女だからこそ、観

察のし甲斐<sup>がい</sup>があると認めていた。

だから、助けることも吝<sup>やんちゃ</sup>かではない。

「一応」とヴィクトはスマートフォンを取り出した。

「俺はこの船の設計者と連絡を取ることができると  
リーゼロッテが見開いた。

「ダークマタ教授を知っているか？」とヴィクトは問うた。

「ええ、この船やアイギスシステムを作ったお方ですわ  
よね？ 知り合いでして？」

「友だ。俺がヴィクトリア号に乗船できたのも、彼女か  
らのコネだよ。あと、この船の名は俺から取られている  
んだ」

「ま！ どうりで素敵なお名前だと思ってましたの」とりーゼロツテは瞳を輝かせた。

ふふんと笑ってから、ヴィクトがスマートフォンに触れようとした、瞬間。

天井から映写機が降りてきて、光が床を照らし出した。すると、そこには突如として白衣の少女が現れた。中性的な容姿の美少女である。灰色の髪はぼさぼさに跳ねているが、整えればかなりの艶質だろうと予測される。

大きな赤縁眼鏡の奥には、碧眼が光っていた。

《やあ、ヴィクト。ボクサー、ダークマタサー》

「誰ですのっ!? というより、なんですのっ!？」

《ホログラムサー、ホログラム。知ってる?》

現れた中性的な容姿の美少女――ダークマタ教授は欠伸あくび混じりに口を開いた。

《それでさ。アイギスをどうしようしろ、っていう要望なんだけどさー。聞きかねるね》

「何故なぜだ？」

ヴィクトが疑問すると、ダークマタ教授は億劫おっくうそうにその場へ座り込んだ。白衣の裾からはちらりとピンクの下着が覗いている。下着の上から直に羽織はっおっているらしい。

《解るだろう、キミならさー。ボクがどういう目的でこの船を造り、ボクが今から何を見たいのか、さー》  
「ふふん、諦めた方が身のためだと思うが？」

《知ってる。けど、試したいんだよね》

ボクの科学が何処まで通じるのか、とダークマタ教授は続けた。そうして、それっきりダークマタ教授は通信を途絶えさせた。

ホログラムが消え、光の粒子が弾けて消える。ヴィクトは肩を竦<sup>すく</sup>め、リーゼロッテを見やった。

「相変わらず、会話が通じない奴<sup>やつ</sup>だったな。……すまないが、アイギスシステムを説得することは無理そうだ」「そう、ですの」

リーゼロッテは浮かかない表情をした。

ヴィクトは流石に心配し、声を掛けた。モノクルの位置を直してから、



「まあ、気落ちする必要はないさ。まだ打開策は幾つか残っている」

「それはありがたいことですが……」

快活かいかつなリーゼロッテには珍しく、妙に歯切れが悪い。

彼女は内股うちまた気味にもじもじと身体をくねらせると、慎重に唇へと言葉を乗せた。

「その、さっきのダークマタ教授というお方、あの……美人でした、わよね？」

「？ そうだな。それがどうかしたか？」

「仲良し、ですか？」

上目遣うわめづかいのリーゼロッテが、ヴィクトの顔を覗き込ん

でくる。心なしか、彼女の眦まなじりは涙できらきらと輝いてい

る気がした。

ほんのり赤らんだ頬……

見目麗しい美少女に、そのような目で見上げられてしまつと、幾らヴィクトといえど困つてしまふ。咄嗟とっさに目を泳がせつつ、彼は口を開いた。

「仲は良好だ。あれで意外と気が合うんだよ」

「ももも、もし、もしかして、恋人、だったり、しちやいますの？」

「いや、違うが？」

リーゼロッテは途端に胸を撫で下ろし、大きく息を吐はいた。

「ですわよねっ!? ……よかった」



「恋人が不在なことを喜ばれると、なんだか複雑なんだが……」

「い、いえ、決しておとし貶めようとか、そういう意図はございませんのよ」

ヴィクトは頭を搔かき、咳払いをした。

「ともかく、早く先へ進もう。壁を排除する方法はまだある。お前の目的がどうやって解決されるのか、見届け  
る権利は勝手にいただくぞ」

「……目的」

とリーゼロッテはぽつりと呟いた。

「そういえばヴィクト様にはまだわたくしのノブレス・オブリージュ貴族的目的をお話ししていませんでしたわね。この際ですし、ヴィ

クト様は信頼に足る方ですから、お話しさせてくださいな」

「何か他に目的があるのか？」

こくり、とリーゼロッテは頷いた。真似るまねようにヴィクトも首肯しゅけんする。

「ならば聴こうか。ただし、お前のノブレスなんたらは説明に使わないでくれ。正直、あまり意味が解らない」  
「意味ではありませんの。ノブレス・オブリージユは気持ちですわあ！」

「すまない。芸術はよく解らない」

二人は廊下に設置されていたソファへと腰掛けた。近くには自動販売機が設置されているが、ヴィクトもリー

ゼロツテも小銭を持っていないので購入できなかつた。  
革張りのソファは上質であり、肉体が何処までも沈んでいきそうだった。

「わたくしはこのヴィクトリア号にヴァカンスのためにやって来たわけではありませんの。貴族的——ええつとお、パパのお仕事のお手伝いに来ましたのよ」

「手伝い、か。船に乗ることが手伝いになるとはな……お前、うるさいから余所よそにやられたんじゃないのか？」

「それもありますけれど……」

あるのかよ、とヴィクトは口の中だけでツツコんだ。

「一番の理由は取引のためですわ。パパの政敵の不正の証拠を手に入れたいのです。これを上手く使えば悪は滅

び、その上でパパの地位が更に確固としたモノとなりますわ」

リーゼロッテは誇らしげに続けた。

「なにせパパはさいこーのパパですから、きつとさいこーの政治家にだってなりますわ。そうすれば世界の人はハッピーで、貴族もにっこりですの」

「で、どうしてお前が取引に来たんだ？」

「パパもママも敵に見張られていますもの。そして、パパが信頼できる人たちも同じですわ。しかし、ほんのちよつぴり、本当に少しだけ風変わりな娘と名高いわたくしは比較的フリーな上、両親にも大変信用されていますから」

「ほんのちよっぴり、本当に少しだけ？ ……はっ」

「鼻で笑わないでくださいましっー！」

護衛付きで船に乗せること自体は不自然ではない。であれば、金持ち娘の我が儘<sup>ま</sup>を装い、秘密裏に取引を行うことも可能だろう。

ヴィクトは納得した。

「それで、だ。肝心の取引とやらは終わらせたのか？」

「それがまだですの…：…本当でしたらダンスホールで合図をして、こっそりと証拠入りのチップだけをいただく予定でしたが」

「合図？」

ええ、とリーゼロッテは大きく頷いた。彼女は空中で



見えないバナナの皮を剥く動作をしてから、それをまたもや見えないテーブルの上へと置いた。

「こうやってバナナの皮を直接テーブルに乗せるんですの。ポイントとしては、山のような形に置くのではなく、その逆向きに皮を置くんですのよ」

よく漫画で見られる滑るようにと置かれる向きではなく、その逆方向にバナナの皮を置けば商談成立の証だそうだ。その逆であれば交渉はなかつたこととなるらしい。が、ヴィクトは眉根を寄せた。

「あまりにも杜撰じゃないか？ お前以外の誰かがバナナを食べたらどうするんだ？」

「ここは金持ちたちが見栄を張る場所ですわよ？ 片付

けに困り、いまいち優雅に食べ辛いバナナをわざわざ食べる人は少ないですし、無造作にテーブルに置く人なんて居ませんわ！なるべく、合図は解りやすく、それについて怪しまれないのがグッドですの」

ちよっぴり変わった娘であると勇名を馳<sup>は</sup>せるわたくしでしたら、怪しまれずにバナナの皮をテーブルに放置できますのよ、と彼女はその薄い胸を張って言い切った。

自分で言っつて悲しくならないのだろうか。

まあ、しかし、リーゼロッテの真の目的はよく解った。彼女が未だにチップとやらを入手できていない、ということも、である。

この混乱の中では見つけることは、もう不可能に近い

だろう。

ヴィクトはほとんど諦めつつも、礼儀として尋ねておくことにした。

「そのチップとやらはどういうモノなんだ？ もしも見つけたらお前に渡すことを約束してやっても良い」

「たしか、指輪型のチップでしたわ。あと、データは誰かに見られた時を想定して小説形式の暗号で描かれています。そうです」

「暗号か。無事に持ち帰ったとして、それを解読できるのか？」

「さあ？」とリーゼロッテは小首を傾げた。

「てきとーだな、おい」

「何やら赤い本？　が必要のようですけど、……その辺りはパパが巧うまくやっってくださいますわ！」

「どうやら、リーゼロッテの求めるチップは、『赤い本』が原典となっていてらしい。つまり、その原典との差異を比べることにより、暗号の解読が可能となるのだ。」

政治家の暗躍については解らないが、ファンタジーじみた慎重さであつた。

それほど、グレースネス家は今回の暗号に意味を見出みいだしているのだろう。

その土壇場で頼れるのが、今もふんすと鼻息荒くガッツポーズを決めているリーゼロッテ、というのは、グレースネス家の人材不足を憂慮せざるを得ない。

「ふふん、それにしても小説、か」

ヴィクトは腕組みをした。面白い話を聞いた。彼がこの船に乗った理由もまたヴァカンスではなく、『黒の書』と呼ばれる小説を入手することにある。この船に持ち主が居るかもしれない、としか情報は与えられていないが、もしかするとリーゼロッテの言うチップがそうなのかもしれない。

無論、その可能性が低いことは承知の上だ。

元々、ほとんど諦めていたのだ。仮に、チップの中身が別の小説であつたとしても、暗号が隠されている小説だなんてそうそう拝めるモノではなく、悪くない機会であつた。

リーゼロッテに協力することは確定していたが、そこにメリットが生まれたことによつてよりやる気が増した。ヴィクトは立ち上がった。リーゼロッテへと手を差し伸ばす。

「リーゼロッテ。俺はお前の言う小説に興味が湧いた。手伝う代わりに、俺にそれを読ませる権利をやるう」  
「なんて捻ひねくれた言い方ですの……まあ、ヴィクト様になら構まいませんわ」

そう朗ほがらかに言つてリーゼロッテはヴィクトの手を取つた。やはり、何かを特訓している所為か、貴族というものには硬質な手の感触に、ヴィクトは小さく笑つた。

「……はは」

その手の温かさには、ヴィクトは幼少期の頃を思い出していた。

昔、今と同じように誰かと手を握り、それを喜んだことがある。その時の少女とリーゼロッテとはよく似ているような気がした。

正義感が強く、頑張り屋で、少しだけ抜けている。当時の記憶を思い出す度、彼の胸は焼けるように熱くなつた。

手を握られたことにより、恥ずかしそうに俯いてしまつたり、ゼロツテ。

……そのような少女のことが、ヴィクトの瞳には太陽のように眩まぶしく映っていた。

「今度こそ」とヴィクトは小さく呟いた。

今度こそ、太陽を見失うことはしない——とヴィクトは決意を改めるのだった。

▽ 令嬢 リーゼロツテ・M・グレースネス  
男性と手を繋いだのは初めてのことである。

今まで握手を交わす機会があったが、こうやって誰かの手を握るのは初めてのことであった。小説家であるヴィクトの手は、イメージしていた男性の手とは随分とかけ離れた感触をしていた。柔らかくて温かい。筋のない、高級なお肉のようである。

リーゼロツテは内心で滝のような汗を流していた。手



汗が凄く、今すぐにも離してしまいたいのだが、勿体もったいないような気がしてそうもできない。

（やばいですわ……わたくしの手、ゴツゴツしていて恥ずかしい）

彼女は己が訓練の一切を恥とは思っていないし、その結果、どれだけ身体が傷付こうが関係ないとすら思っている。必要とあれば顔に傷を負ったって構わない。そう考えていた。

だが、いざ殿方との接触をしてみると、自分の手が女の子しゅうちしていかないことが妙に羞恥あおを煽った。相手の手が思ったよりも柔らかかったことも、彼女の感情を惑わせた。二人は並んで廊下を歩いている。

結局、シャッターを破壊する案は却下となった。アイギスシステムを敵に回すことを厭<sup>いと</sup>うての選択である。迂<sup>うかい</sup>回路<sup>回路</sup>に行く。

リーゼロッテのうなじに汗が伝う。

伸ばされた手を取ったは良いものの、リーゼロッテはそれを放す機会を逸<sup>いつ</sup>していた。だから、今までずっと手を繋いだままだった。

女の子している気がしてちよつと嬉<sup>うれ</sup>しい。

あまり貴族的行為ではないが、それも許容できた。

そうやってしばらく歩いていると、戸惑った様子のヴィクトが視線を合わせてきた。

「……なあ、リーゼロッテよ。お前、いつまで俺の手を

握っているんだ？」

「え、いや、これはその……貴方様が放してくれないから」

「いや、俺はとうの昔に脱力させているさ。お前の力が強いから、ほら見てみる。手が死人みたいに真まっ青さおになっている」

あつ、とリーゼロッテは目を剥いた。たしかにヴィクトの手からはまったく握り返そうという意思が見受けられない。自身の手が強く男の手を搦にらんでいるのが見えた。リーゼロッテの顔がみるみる朱に染まっていく。

「ふふん」とヴィクトが嗜虐しぎやく的に笑った——ように見えた。

「どうやら怖いらしいな。まあ、テロリストを前にすればそれも仕方ないさ」

ヴィクトは手を放さぬ理由をそう判断したらしい。軽く手に力が入り込み、握り返してくれたのが解る。軽カッと胸が熱くなる気がした。

「有事の際には放すように頼むよ。動けないのは困るからな」

ヴィクトは顔色一つ変えず、平然と廊下を進んでいく。（こゝこの方慣れてますわ。もしや、ヴィクト様はプレイボーイでして!? いけない殿方にはまっつていく貴族女子……ああ、なんて。だめ、だめだめ）

一人で脳内ピンクな妄想もうそうを繰り広げるリーゼロッツテの

足が、何かを蹴<sup>け</sup>飛ばした。

「おや、なんででしょう？」

と足下を見やると、無造作に転がった缶ジュースがあった。ひとつやふたつではなく、<sup>おびただ</sup>夥しい数の飲み物が床一面に散乱している。近くには自動販売機があり、どうやらそこから飲み物たちが溢れたらしいことが解る。

「壊れたのでしょうか？ アイギスシステムは何をしているのでしょうか？」

「付近の監視カメラが破壊されている……近くをテロリストどもが通ったのだらう。だとすると、俺たちも本腰を入れて備えねばならないようだ」

ヴィクトの手が無言で離れていった。

「あっ」

と思わず切な気な声をあげてしまった、いけないお口を自らの手で慌てて塞ぎ<sup>ふさい</sup>つつ——さっきまでブイクトの手に触れていた手が、唇に触れたことにドギマギした——、リーゼロッテは前方を鋭く睨んだ。曲がり角。

そこを少し行けば上層へと繋がる階段があるらしい。リーゼロッテの護衛の一部隊は三階で待機する<sup>てはず</sup>手筈となっていた。何故だか連絡がつかないので、まずは彼らと合流することを優先している。

あと少しで第一の目標が達せられる。が、ことはそう上手く進んでくれないらしい。

曲がり角の先、聞いたこともないような騒音が繰り返されている。

砲撃音と類似した轟音<sup>ごうおん</sup>。

やや怯<sup>おび</sup>えるリーゼロツテとは対照的に、ヴィクトが自然体で問うて来た。

「どうする？ 引き返すか？」

「……いいえ、引き返しませんわ。ヴィクト様はここに居てくださいまし。貴族的戦闘<sup>ノブレス・オブリージユ</sup>に民たる貴方様を巻き込めませんもの」

「ふふん、お前はお前の好きにすると良い」

ヴィクトはモノクルの下の目に光を灯<sup>とも</sup>し、こう続けた。

「——俺もそうさせてもらおう」

正直、ヴィクトが居てくれると心強い。戦力としては頼れないが、なんだかなんとかかしてくれそうな雰囲気——非常事態だということに欠片かけらも心を乱さない胆力——に底知れなさが付随している。

けれど、リーゼロッテは不安でもあつた。

果たして弱い自分が本当にヴィクトを守ることができ  
るのか、と。

（わたくしイン・ブレス・オブ・リージュの信念とは反しますが。

最悪、貴族的イン・ブレス・オブ・リージュの不意打ちも視野に入れねばですわね）

貴族はなるべく正々堂々、というのは両親からの教え  
である。「なるべく」なのはそれを教えた両親が、正義  
のために泥を被かぶる必要性を知っていたからだろう。



キューを持つ手に力が入る。

ヴィクトはというと、落ちていたペットボトルをひとつ拾っていた。

「ふふん、これくらいは駄賃だちんとしてもらっても構わないだろう」

投擲武器とうてきにでもするのだろうとリーゼロッテは推測した。

「……っ」

慎重な足取りで曲がり角へと近付いていく。

一歩毎ごとに心臓が高鳴る。汗が滲にじむ。

このような巨大な音を発生させる何か、ビリヤードのキュー一本で立ち向かわねばならぬのだから——こ

の恐怖は筆舌ひつぜつに尽くし難い。

「……ノブレス・オブリージユ貴族的勇氣、ですわ」

リーゼロットは貴族の誇りだけをエネルギーに、前へと進む勇氣を手に入れた。

後一步で曲がり角の先が見える、という位置に着く。

「ヴィクト様」

とリーゼロットは小声で男の名を呼んだ。

「わたくしが先に行って先制攻撃を仕掛けます。そのあと、ヴィクト様が続いてください。荒事になるかと思われまますので、ご準備を」

と。彼女はヴィクトが握るペットボトルを見やった。

蓋ふたを開けたまま投擲すれば、一瞬とはいえど、敵の注意

を逸そらせるだろう。

液体が身体や顔に掛かれば、普通の人間だったら僅わずかに怯ひるむ。

ごくり、と息を呑のむと同時に……飛び出した。

「てりやあーですわあああああ」

振りかぶったキューを叩つき付けようとしてーりー  
ゼロツテは慌わてて中断した。

戦意を一気に表情から吹き飛ばし、その代わりに安堵あんど  
の表情を浮かべる。何故ならば、曲がり角の先、シャツ  
ターに向かって拳を連打している男性の背には覚えがあ  
ったから。

「無事でしたのね、平田ひらた！」

貴族的僥倖ノブレス・オブリージユですわっ」

そう、そこに居たのはリーゼロッテの護衛の一人、平田であつた。

身長は二メートルに届く。肩幅は熊のようにでかく、筋肉の鎧よろいが窮屈きうくつそうにダークスーツに圧迫されている。その男は一心不乱にシャツターを殴打していた。

「どうしましたの、平田。わたくしですわ。リーゼロッテ・M・グレースネスですわよ？ あの、感動の再会風になると嬉しいなあ、なあって」

一人喜んだリーゼロッテであつたが、あまりにも自分に無関心な平田に拍子抜けしていた。有あり体ていに言うのと、ちよつと寂しかったのである。

ヴィクトが呆れたように口を開いた。

「おい、リーゼロッテ。この男、少し変だぞ？ お前の  
親戚か？」

「それ、わたくしが変人みたいじゃなくって!？」

「事実だろうさ」

そうですけども、と応じるリーゼロッテ。

戦意喪失してキューを下ろした途端、平田の腕に視線  
が釘<sup>くぎ</sup>付けとなった。

「平田、どうしましたの、その腕は！」

平田の腕は折れていた。

にもかかわらず、折れている腕でシャッターを殴り続  
けている。しかも、その殴打には十二分の意味があるら  
しく、鋼鉄のシャッターが見る間に凹<sup>へ</sup>んでいく。

明らかに異常である。

焦燥しやうそうに駆られ、リーゼロッテは平田の肩を搦なんだ。

「お止めなさいな！ 血が出ていますわよ」

「……邪魔、じやま、する、やつ。みなごろ、し……：パ  
パ、パパがんば、ぱぱがんばっちやう、パパ頑張っちや  
う、ぞー」

「何言ってますの、平田！ 貴方はオネエでしょう!?!  
ママではなくって?」

「うるさあああああー!」

平田は唸うなり声をあげ、リーゼロッテの腕を振り払った。  
たったそれだけ。

軽く腕を振るような簡単な動作だけで――リーゼロ

ツテは吹き飛んだ。

「っ、リーゼロッテ！」

一瞬で壁へと叩き付けられたリーゼロッテを振り返り、  
ヴィクトが叫ぶ。

リーゼロッテは壁に叩き付けられた衝撃によつて気を  
失つたらしい。□内を噛み切つてしまったのか、□から  
一筋、血液が垂れている。ぐつたりと彼女は倒れた。

「ふふん」

それを目撃したヴィクトは凄惨せいさんに嗤わらつた。

「この船はやはり面白い。リーゼロッテのような変人の  
みならず、貴様のような化け物とも遭遇できるとはな。

はは、ははははは……あはははは！」

だが、とヴィクトはすつと表情を引き締めた。  
ゆっくりと腕を振り上げていく。

「——貴様はふざけ過ぎた」



## 第二章 キミの居ない世界の中心に

▽ ぽんぽんぽんぽん ゴイクト・ファニー

「——貴様はふざけ過ぎた」

直後。

平田<sup>ひらた</sup>の肉体がシャッターをぶち破り、ボールのように床を跳ねていた。

「必死にその先へ行きたがっていただろう？ シャッターというものは殴って開けるのではなく、そうやって開くのだよ」

「な、なななに、なに、があ」

残滓<sup>ざんし</sup>状に保たれていた平田の理性が、謎<sup>なぞ</sup>の事象を体験

したことにより悲鳴をあげたようだ。彼は動揺するよう  
に己が手足おのれだったモノを見下ろしている。

平田の手足は原形を留とどめていない。

あるのは手足に見えなくもない、肉の欠片かけらであつた。

腕が一本折れていたただけの状態から、一瞬にして平田  
は全身を破壊されていた。

どうやって壊されたのか、平田には何も解っていない  
だろう。

「お、おま、お前は誰だれ、だ？」

平田は震える声で、ヴィクトの背後を干切ちぎれた指で示  
した。

——少女が居た。

リーゼロッツテではない。

無論、ヴィクトでもなければ平田でもない。

新たな登場人物——居なかつた筈はずの四人目が悠然ゆうぜんと  
 漆黒しっこくの廊下に佇たたずんでいた。

淡い空色の頭髮がツールに結ばれている。けれど、  
 あまりもの長さにそれでも髪の毛の先端が床に触れそうにな  
 っていた。

異様なまでの長髪……。

無表情の、人間らしからぬ顔立ちは、恐ろしいくらい  
 に整っている。曇天どんてんのようにどんよりとしたジト目は、  
 まるで昆虫でも見下すように平田を捉とらえていた。

その人間らしからぬ少女は豪奢ごうしゃなジュストコールの袖そで

——17世紀頃の男性用上着である——をひるがえし、よく響く靴音を鳴らしてリーゼロッテの方へと寄つていった。ただ歩いたただけだというのに、その姿は神秘性に満ちていた。

——魔性、という言葉こそが相ふさわしい。

少女は、静かにリーゼロッテの胸に手を当てると、小さくうなず頷いた。

「……ん」

「そうか、やはり無事だったか。ふふん、丈夫なことだ」

「……………どうするの」

無表情の少女は消え入るような声で小さく尋ねた。そ

れに対してヴィクトは死刑宣告をする裁判長のような威  
厳で以て、応えた。

キルデス、と少女に呼びかけ、そして。

「あの男を——拘束するな」

頷く少女——キルデスの足下で影が伸びた。その影  
は床から引っぺがされるようにして剥離し、夥しい量の  
豪腕へと変じた。

目の前に突如と出現した怪異を前に、平田の顔が青く  
青く死んでいく。

「お前は……なに、者、だ」



ヴィクトは白々しく肩を竦めた。

「ヴィクト・フアニー。小説家にして、どこにでも居る  
しがない——悪魔使いだよ。」

無数の腕が一拳に伸びていく。

焦ったように平田は回避に専念するが、百を超える豪  
腕を前にしては、雨を避けようとする愚行と変わら  
ない。咄嗟に彼は判断を切り替え、腕の迎撃に移行した。

迫った腕の一本を真正面から打撃する。  
が、吹き飛んだのは平田の腕の方だった。

「あっ、ああ、あああああ！」  
咆吼とともに暴れる平田。

だが、キルデスの影の手は容赦なく、平田の全身を影

のドームに閉じ込めてしまう。拳こぶしひとつで鋼鉄のシャツターを破壊する化け物は、呆あっけ気なく、強制停止させられた。

ぐずる赤子を寝かしつけるが如ごとく、呆気なく……

「よくやったキルデス」とヴィクトが言った。「もう地獄へ帰れ」

「……しくしく。酷ひどい。ご主人様。わたしはこんなにも健けなげ気なのに」

「ふふん、命令ひとつ素直に従わないくせによく抜かす」

しよんぼりと肩を落としたキルデスの隣を横切り、ヴィクトはリーゼロッテの顔面へとペットボトルの中身を



ぶちまけた。水分を顔に受けたことにより、彼女は目を覚ました。

「何が起こったんですの？」

「平田とやらは停止させた。あそこに居るのは……変な女だ」

「……わたしは変じゃない。変なのはいつもご主人様」  
完全に現状に取り残された形となったりゼロツテは、目を点にしてあらゆる場所をキョロキョロと見やっっている。

無理もない。

いきなり部下が怪物みたく豹<sup>ひょう</sup>変<sup>へん</sup>し、自身が気絶している間に、ちよつと良いなと惹<sup>ひ</sup>かれつつある異性が、謎<sup>なぞ</sup>の

美少女を罵倒ばとうしていたのだ。しかも、その化け物へと変じた部下は、謎の黒いドームの中に閉じ込められているという。今も呻うめき声が聞こえてくる。

「えっと、平田は無事ですか？」

「ああ、死なない限り、キルデスであれば回復させることが可能だ」

「ちよつと意味わかんないですの」

ノブレス・オブリージュ  
貴族的イミフですわあー！ とリーゼロッツテは頭を抱えていた。

それからヴィクトは己おのれが素性を簡単に語り始めた。

要約すると、小説の題材に魔女狩りを調べていたところ、なんだか意味深な資料を見つけ、その内容を実践

してみたら何か出た。

それこそが大悪魔キルデスである。

なんでも願いを叶かなえよう、というキルデスにヴィクトはこう願った。

『いや、取材は終わったから不要だ。帰れ』

それが致命的な願いであつた。じつは、キルデスは『偽り』を愛する悪魔であり、下等な人間にわざと召喚しょうかんされては、その願いの逆を行うと決めていたのだ。

つまり、使い尽くせぬ贅ぜいを望めば貧困を。

つまり、不老不死を願えば即死を。

つまり、女にモテることを願えば男にモテるように……と。

願いの正反対を与えると契約している悪魔であった。だからこそ、キルデスは『帰れ』と命じられた所<sup>せ</sup>為<sup>い</sup>で帰宅不可となり、更にはヴィクトから離れられなくなっただのだ。

という情けない過去を暴露されたキルデスは、無表情のまま、いやんいやんと恥ずかしげに身体をくねらせた。

「……おかげでわたしはご主人様とずっと一緒。実質、嫁」

「ふふん、地獄ではなんというのか知らないが、この世界ではそれをストーカーと呼ぶんだ」

「名前なんてどうでも良い」  
とキルデスはヴィクトに抱きつこうとして、頭を押さ

えられて制止された。

「……あれが悪魔ですの？」

想像を裏切られた、という顔でリーゼロッテが小さく  
呟いた。

こほん、とキルデスの頭を押さえつつ、ヴィクトが影  
のドームへと視線を移した。

「それで？ キルデス。中身のあいつはどうなった？」

「……治療はした」

キルデスは抱きつくことを諦め、自らの頭に触れたヴ  
ィクトの手を堪能するべく、頭を左右に振って無理矢理  
気味に頭を撫でられていた。しかし、そのように甘えつ  
つも、冷酷な表情は保ったままに指を鳴らした。

影のドームが消失する。

中から現れたのは涎よだれを垂たらし、血走った目でこちらを睨にらむ平田である。

「精神は治せないのか？」とヴィクトが尋ねると、  
「わたしが治せるのは外傷とテレビだけ」

「そうか。便利な悪魔もいたモノだな……ありがとう」  
「うれしい」とキルデスは真面目まじめな声こわねで反応した。

ヴィクトはリーゼロッテに向き直った。

「理由は解らないが、平田とやらは普通ではない。原因を解明するまでは放置するしかあるまいよ」

ヴィクトは腕を振り上げ、淡々と告げる。

「キルデス。やつを動けるようにしてやれ」

「……ん」

影が鎖状くさりに伸び、平田の全身をガチガチに拘束した。その様子を心配そうに見つめていたリーゼロッテの頭を撫でながら、ヴィクトは先を急ぐことを提案した。ずっとここに居ても実りはなく、リーゼロッテの目的は遠退とおのくからだ。

リーゼロッテは少しだけ迷ってから、瞳ひとみに活力を取り戻した。

「解りましたわ。今度こそ、わたくしのノブ・オブをご覧に入れますわね」

「とうとう略しだしたよ……」

呆れあきを隠しきれず、ヴィクトは両肩すくを竦めた。

「そういえば」とリーゼロツテが不思議そうな顔をした。「どうして今までキルデス様をお呼びになられませんでしたの？」

「ああ、それか。単純な話だよ。……つまらない話だから言わないでおこう」

ヴィクトは何故<sup>なぜ</sup>だか言い淀<sup>よど</sup>んだ。

キルデスが色のない顔を保ったまま、くすりと嗤<sup>わら</sup>った。

「……チケットが一人分だったから」

「どういことですか？」

「ご主人様は基本的に真面目」

なるほど、とリーゼロツテは頷いた。

「無賃乗船<sup>ほうじよ</sup>幫助を嫌った、ということですかね？」



「そう」

ヴィクトが手持ちぶさたにモノクルの位置を調整した。  
「やめろ。まるで俺おれが良い奴やつみたいじゃないか……恥ずかしい」

「結局、ご主人様はわたしを呼んだ」

「やめろ。まるで俺が悪い奴みたいじゃないか」

ヴィクトはくたびれたように肩を落とした。

「……もう良い。先へ進むぞ」

かくして一行は先を進むことに決めた。

だが、その前にと寄り道をして、ジュースが散乱していた場所へと舞い戻る。

ヴィクトは単純に喉のどが渴かわいていた。飲もうと思っ

たジュースを、リザーブを起こすために用いてしま  
ったので替えが必要だったのだ。

常軌を逸したキャラクターが織りなす  
疾走感あふれる群像劇！



2018年12月15日頃  
全国の書店さまで発売！

スクランブルイレギュラー  
Scramble Irregular  
エラー  
悪魔使いと6つの異常

第10回GA文庫大賞  
優秀賞  
受賞作